

クトゥルフ神話 TRPG・リプレイ

庭師は何を口遊ぶ

- 宿利班編 -

シナリオ：USB 様

KP：ふろーたいさ

イラスト・スチル（敬称略）

ふろーたいさ、きのだい、はさみ、おひたし

キャラクターイラスト（敬称略）

きのだい、はさみ、さつき、おひたし

DTP・編集など

ましまろ

目次

シナリオ概要

4

キャラクター紹介

6

リプレイ

17

あ

なた方は警視庁特殊犯罪捜査零課（通称『ゼロ』）の同僚である。各々がそれぞれに特化した技能を有しており、四年前の結成当初からの付き合いだ。紆余曲折ありながらも、共にそれだけの年数を過ごしてきた。

共通の同僚である『桜井 咲凪（さくらい さな）』は温厚で優しい女性であったが、三年前とある事件によって死亡してしまう。

あなた方はその光景を忘れた事はない。

とある教会跡地にて、まるで磔刑にあったかのように吊るされた彼女の肢体。祭壇の奥に位置していた十字架に無数の蔦が這い、彼女はそこで事切れていた。肉の隙間から色とりどりのアザレア、アイビーそれ以上の美しい花々を咲かせて死んでいたのだ。彼女の目や鼻、口から伸びたものが一層激しく、最初は誰のものかも判別は出来なかったが、ふと「桜井」と呼ぶ声が聞こえ、あなた方はそれを誰であるかを理解した。三年前、応援の刑事達が現れるまでの間、あなた方はその名を叫び、泣き、悲痛と嘆きの中彼女の死体を床に降ろし、ただひたすら慟哭していたのだ。





警視庁特殊犯罪捜査零課



零課のチーフ。学生時代は何不自由なく文武両道に育ち臨床心理士としての資格も所持していることから人の心を読むことに長けている。表向きは不愛想だが仲間や信頼できる相手にはくだけた態度をとる。皇甲斐斗とは家族ぐるみで親交があり幼馴染としても深く信頼がおけることから補佐として傍においている。強メンタルゆえにキザな面がある。



Yadori Ryosuke

宿利 諒介

PL. きのだい

【HO1】

あなたはこの零課のチーフである。

あなたは並々ならぬ精神力を有し、それを用いて部下を率いている。

年齢 35歳

性別 男

身長 168cm

体重 65kg

血液型 A型

誕生日 2月29日

好きな物 カツカレー

カラー #53654f

STR 12

CON 13

POW 17

DEX 10

APP 10

SIZ 12

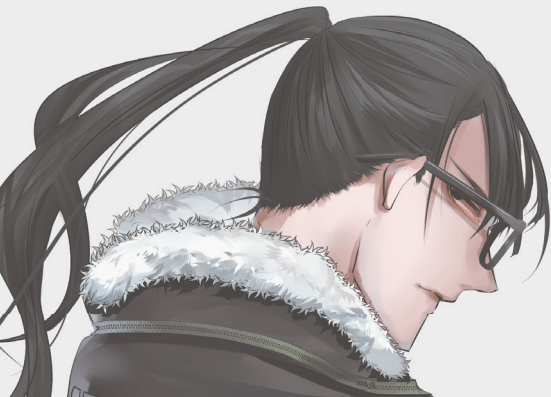
INT 14

EDU 13

警視庁特殊犯罪捜査零課



コンピュータ機械能力に秀で、その実力を買われ宿利班の一員となった。常に仏頂面で話しかけにくい雰囲気醸し出しその口調は荒いが、仲間に対しては情の深い男である。特に宿利班員の前では口数も多く気を許しているのが読み取れ、小鳥遊望とは言い合いが絶えない。宿利班のブレインを担うがどこか抜けているところもある。宿利班の陰口を言った者のパソコンには人知れずウイルスが送り込まれていることがあるとか。



Kagami Tomomi

鏡 朋己

PL. はさみ

【HO2】

あなたは天才的な手腕を持つメカニックだ。
こと機械において、右に出るものは居ない。

年齢 34歳

性別 男

身長 184cm

体重 79kg

血液型 A型

誕生日 6月6日

好きな物 ナポリタン
パズルゲーム

カラー #426579

STR 13

CON 13

POW 13

DEX 9

APP 12

SIZ 15

INT 18

EDU 14

警視庁特殊犯罪捜査零課



零課のムードメーカー。いつも笑顔で元気。とても大食いで普通の人の三倍食べる。ちょっと言動が幼いところがあり、頭を使う仕事は不得意。その代わり怪力で全てを解決するため物をよく壊して鏡朋己に怒られている。正義感が強く「みんなのこと守るからね!」とよく口に出している。桜井咲風とは警察学校時代からの同期で一番の友達。ちなみにIカップあるので上着が閉められない。

庭師は何を口遊ぶ



Takanashi Nozomu

小鳥遊 望

PL. さつき

【HO3】

あなたはこの零課の中でも最も屈強な体を持っている。

また、体術などに於いても非常に優れている。

年齢 30歳

性別 女

身長 155cm

体重 53kg

血液型 B型

誕生日 8月29日

好きな物 宿利班のみんな

カラー #c03367

STR 18

CON 16

POW 13

DEX 9

APP 14

SIZ 11

INT 12

EDU 14

警視庁特殊犯罪捜査零課



性格は温厚。他の部署ともそれなりに上手くやっている。
他部署からは時々ふざけて【皇"貝"斗】と名前を書かれることがある。(ヤドカリ班繋がり)料理とドライブが好き。
愛車はメ〇セデス・ベ〇ツ。
零課のチーフである宿利諒介とは幼馴染みである。



Sumeragi Kaito

皇 甲斐斗

PL. おひたし

【HO4】

あなたは非常に手際良く、俊敏性に優れている。チーフの補佐を任されることが多く、医療の心得もある。

年齢 32歳

性別 男

身長 177cm

体重 62kg

血液型 O型

誕生日 4月7日

好きな物 ごま入りの
おいなりさん

カラー #DEB887

STR 13

CON 8

POW 14

DEX 20

APP 17

SIZ 13

INT 15

EDU 11

警視庁特殊犯罪捜査零課





Sakurai Sana

桜井 咲凪

KP. ふろーたいさ

【KPC】

3年前の「庭師」による事件で死亡した零課・宿利班の元メンバー。
とある教会跡地にて、その肢体に美しい花々を咲かせ、まるで磔刑に
あったかのように吊るされていた。

クトゥルフ神話 TRPG ・ リプレイ

庭師は何を口遊ぶ

- 宿利班編 -

2022/05/16

～ 2022/05/23

LOG

——庭師は、色とりどりの花々と、自身の望んだ緑を添え、虚構の庭園を作り上げた。
この世界が存在しているから人間が存在しているのではなく、
また人間が存在しているから世界が存在しているのではない。
両者に前後関係はなく、ただあるのは——。



今日は桜井咲風の三回目の命日だ。三年前謎の犯人『庭師』によって殺された同僚の事、そして事件の事を絶対に忘れまいと、必ずこうやって集まるようにしているのだ。飲み屋での場、猪狩、神童、そして長く付き合っているジャーナリスト泉で合流する前に零課の面々で墓参りに来ている。

小鳥遊望…「さなちゃん……」

鏡 朋己…「月日が経つのは早いものだ……」

皇甲斐斗…「もう三年ですか……」

宿利諒介…「……………そうだな、まだそこまで経つたように思えないな」

皇甲斐斗…「犯人も未だ見つからず……………悔しいですね……」

小鳥遊望…「……………*ニッ*」(唇を囁む)

鏡 朋己…「そうだな……………思い出すたびはらわたが煮えくりかえる」

宿利諒介…「桜井のためにもはやく、一刻でも早く犯人を見つけて……」

宿利諒介…「見つけてやりたいのに……」

現場 元…「そうか、もう三年も経ってしまったか……。俺も一応課は変わっても捜査はしているんだが、如何せん立場が立場だから上手く動けなくてな。すまない」

神童 大輔…「……………」、そっち（零課）も大変だった……………よな？最近は……………しつかり眠れているか？」

宿利 諒介…「ええ、物理的に眠れていると言われればそう返しますが……三年前のあの日以来、まともに眠れたと言えば嘘になりますかね」

皇 甲斐斗…choice(眠れた・眠れない)(choice(眠れた・眠れない)✓眠れた

皇 甲斐斗…「まあ……………ここ最近はやつと眠れるようになりましたかね……………」

小鳥遊望…「……………いざと言う時に体力がないと困りますから、寝ては、います」

鏡 朋己…「元々眠りは浅いですが、あのことばかり思い出しますね……………」

神童 大輔…「まあ、あまり無理はするなよ。と言っても難しいだろうが」

猪狩幸太郎…「まあ確かに！あの時のアンタらつて必死過ぎて怖かったんだよね。何か心此

処にあらずつてやつでさ。まゝそんなところもお氣になんだけどね！」

泉 立夏…「幸太郎ちゃんはなんというかぶれないわね」

鏡 朋己…「必死になるのも当たり前だろう！」

宿利 諒介…「声を荒げるな、鏡」

鏡 朋己…「……すみません」

小鳥遊 望…「……そりやそうですよ……大切な、友達を失ったんですよ……？」

的場 元…「はは、宿利もだいぶチーフが板についたな。鏡もあまり宿利を困らせるなよ」

鏡 朋己…「……心得ます」

宿利 諒介…「畏れ入ります。先輩には敵いませんが……」

的場 元…「とにかく。元氣そうならそれでいいさ」

各々あなた方を慮るような事を言い、時折桜井の思い出話をしていたが、徐々に事件の本格的な話し合いへと発展していった。特にこれといって成果はないような話だったが、泉が突然得意げな顔でこう告げてきた。

泉 立夏・・「そもそもあの花、普通じゃなかったじゃない？ あんなにいつぺんに色んな花持ち歩いていられる訳ないんだから、いつそ種が特殊だったかもしれないって私考えてたのよ」

泉 立夏・・「だからそういう点でちよつと調べものする予定よ」

猪狩幸太郎・・「はー！ オカルトっぽい！」

的場 元・・「ほお……」

神童大輔・・「なるほどな……」

皇甲斐斗・・「特殊な植物なんて聞いたことありませんけど……どうやって調べるんですか？」

泉 立夏・・「それは企業秘密」

皇甲斐斗・・「えー！ 教えてくださいよー！」

泉 立夏・・「ゴネられても何もでないわよ？ まあ安心して。何かわかったらすぐ教えるわ」

小鳥遊望・・「気になるけど……泉さんが言うなら……」

猪狩幸太郎・・「そういえば三年前つてので、なーんかアンタらに聞きたい事あんだよなって思ったんだけど忘れちゃったな。ま、大したことじゃないんだろーけど」

神童大輔・・「……………猪狩は鑑識しか興味がないからな」

鏡 朋己…「早く思い出せ」

宿利諒介…「…思い出してからで構いません」

猪狩幸太郎…「え〜！そんなすぐには思い出せないって〜！」

小鳥遊望…「ともちゃんハウスハウス！」

鏡 朋己…「犬扱いするな！」

宿利諒介…「先輩の前くらい大人しくしろ」

鏡 朋己…「はい」

猪狩幸太郎…「そうだそうだ〜」

鏡 朋己…「お前は黙ってろ」

宿利諒介…「鏡」

猪狩幸太郎…「がーん！」

皇甲斐斗…「まあまあ…：…朋己さんにか飲みますか！」

鏡 朋己…「……………」

鏡 朋己…「皇……………」

小鳥遊望..「お腹すいた〜!!!」

暫く待っていれば生ビールとチャーハン大盛りがテーブルに運ばれてくる。とてもおいしそう。

小鳥遊望…「いただきます!!!!!!」

鏡 朋己…「よく食うな……」

皇甲斐斗…「望ちゃん本当によく食べるねえ」

宿利諒介…「小鳥遊の食いつぷりは見ごたえがあるからな」

泉 立夏…「相変わらずよく食べるわね」

小鳥遊望…「いっぱい食べないとみんなを守れないですから!!!!」

皇甲斐斗…「良い子だなあ」

宿利諒介…「小鳥遊のこういうところに救われるんだよな」

的場 元…「そうだな。しっかり食べてこいつらの面倒みてやれよ」

猪狩幸太郎…「俺も見習わないと〜!」

小鳥遊望…「ともちゃんもたくさん食べなよ!!!! (皿に盛る)」

鏡 朋己…「いらん」

小鳥遊望…「そんなこと言わないで〜 (どんどん盛る)」

鏡 朋己…「おい……！」

鏡 朋己…（助けを求めるようにチーフと皇を見る）

宿利諒介…「その体には必要な量だろ」

鏡 朋己…「チーフが言うなら……」

皇甲斐斗…「たしかに朋己さんはもう少し食べないと」

鏡 朋己…「お前まで……」
クッ

小鳥遊望…「うんうん！」

鏡 朋己…choice（チャーハンを完食できる、チャーハンを残す）（choice（チャーハンを完食でき
る、チャーハンを残す））チャーハンを残す

鏡 朋己…「もう食えん」

皇甲斐斗…「はは……じゃあ残りは俺が食いますよ」

小鳥遊望…「もお（ぶんぶん）」

そうしてあなたは達は雑談を交えつつ食事をする。

食事も終わりある程度時間が経ったところでの場が席を立つ。

的場 元…「さ、そろそろてっぺんを越えるぞ。勘定して帰ろう」

宿利諒介…「そうですね、じゃあ今日の分は俺が」

的場 元…「そうか、では今日は宿利の顔を立ててごちそうになろうか」

宿利諒介…「ええ、皆さんそうしてください」

皇甲斐斗…「チーフ…ありがとうございます！ご馳走さまです！！！」

神童大輔…「ありがとうございます。宿利さん」

小鳥遊望…「えへへ…ごめんチーフ、たくさん食べちゃった…」

猪狩幸太郎…「ごちそうさ〜！」

鏡 朋己…「すみませんいつも ご馳走様です」

泉 立夏…「なんだか悪いわね、私まで」

宿利諒介…「いいえ、皆さんお世話になってますから」

宿利諒介…「お前らはその分働いてくれることを見越してのことだぞ」

鏡 朋己…「もちろんです」

皇甲斐斗…「宿利班がんばるぞー！」

小鳥遊望…「おー！」

宿利諒介が会計を済ませ、貴方たちは店を出る。今日は各々自宅へ帰る事だろう。

三回忌という事だからか、桜井の命日だからか、それとも泉が植物の話をしたからなのか、あなた方はそれにまつわる夢をみる事だろう。

《H01》…あなたは何か怒鳴っている。一体何に対してなのか、どうして怒鳴っているのかは解らない。ただ視界の端で桜井咲風が横たわっていた。

《H02》…あなたは誰かに何かを懇願している。「やめてくれ」と叫んでいる。しかしそれも何か

の音によって終わりを告げる。

《H03》…あなたは誰かの声を聴きながら、ひたすら手を伸ばし力を込めている。煩い息の音は自分自身から発せられていた。

《H04》…あなたは酷く怯えている。祈っている。どうしてか助かりたいのだ。何に対しても言えず「ごめんなさい」「許してください」と泣いている。

深い深い森の中にいるような、真っ白な霧に覆われているかのような、言いようのない恐怖が静かに忍び寄っている。そんな感覚に襲われながら、あなた方は未だ眠りの中に居る事だろう。

まだ日の出が出ていないような時間帯だ。あなた方は一本の電話で、乱暴に起こされるだろう。その内容に、思わず息をするのを忘れてしまう。

「死体があがつた」

「恐らく『庭師』だろう」

あなた方はその現場へと駆け付ける。現場は、「あの場所」だった。桜井咲風が殺された教会跡地だった。

教会に着いたあなた方を待っていたのは、丁度朝陽によってその身を照らされた遺体の姿だった。色とりどりの花々が、瑞々しい蔦が、その肢体にしつかりと絡み付き、まるで処刑にでもあっているかのような有様で逆さに吊るされている。白いアザレア、赤いアイビー、青い薔薇、きつと死体を苗床にしていなかったら心底美しいと思えただろう。

その苗床となっている顔に、あなた方は見覚えがある。昨晚まで一緒に話をしていたのだから当たり前だ。

落とされた手帳とボールペン。蔦の隙間から辛うじて顔を覗かせるネームホルダー。

ジャーナリスト、泉立夏の変わり果てた姿を見たあなたは SANC01d3

鏡 朋己 : CCB<=65【SAN 値チェック】(1D100<=65)>73>失敗

宿利 諒介 : CCB<=85【SAN 値チェック】(1D100<=85)>14>スペシャル

皇甲 斐斗 : CCB<=70 SAN チェック (1D100<=70)>60>成功

小鳥 遊望 : CCB<=65【SAN 値チェック】(1D100<=65)>60>成功

鏡 朋己 : 1d3 (1D3) > 2

「鏡 朋己」 SAN : 65 → 63

小鳥遊望 : 1d100 (1D100) > 80

鏡 朋己 : 1d100 (1D100) > 61

皇甲斐斗 : 1d100 (1D100) > 92

宿利諒介 : 1d100 (1D100) > 27

《HOI》: 「美しい……………」という声は何処からか聞こえた。

現場には、鑑識の猪狩、捜査一課の的場、神童の姿がある。対応に追われているようで一様に顔色が悪い。

小鳥遊望 : 「泉さん……っ」

鏡 朋己：「嘘だろ……」

皇 甲斐斗：「どうして……っ」

宿利諒介：「……誰が……」

宿利諒介：「……誰かが、……誰がこの現場を愉しんでいる………？」

小鳥遊望：「とにかく、調べないと……」

皇 甲斐斗：「なんで泉さんが標的に………っ」

鏡 朋己：「的場さん、これは……」

首を一突きにされ、即死。抵抗したような痕はない為一瞬の出来事だった事が解る。

小鳥遊望：CCB≦70【目星】(1D100≦70)＞51＞成功

皇 甲斐斗：CCB≦(50) 目星 (1D100≦50)＞89＞失敗

鏡 朋己：CCB≦65【目星】(1D100≦65)＞94＞失敗

宿利諒介：CCB≦65【目星】(1D100≦65)＞57＞成功

体に少量の粉のようなものがついているのが解る。

皇 甲斐斗：CCB×(70) 博物学 (1D100×70) > 27 > 成功

植物の花粉と形状が非常に似ているように思う。しかしこういう種類の花粉は見たことがないという事が解る。

猪狩幸太郎：「知り合いの遺体弄るのとか、調査すんの、やだよな」

遺体を調べていると猪狩が唐突にそう言うてくる。

猪狩幸太郎：「見ての通りの死因だけどねー……………花とかについてはこつちでちゃんと調べて捜査本部で上げっから任せてな」

猪狩幸太郎：「にしても、こうやって吊るしているのみるとさ……………相当な筋力を持ってるか、複数人か、はたまたはまた違う何かありそうだよねえ」

小鳥遊望：「昨日言ってたオカルト的な……………？」

猪狩幸太郎：「そこまではわかんないけどさ」

鏡 朋己…「まるであの時の光景じゃないか……」

宿利 諒介…「こんなことが二度もあつてたまるか……」

神童 大輔…「泉だが、昨日の飲み屋を出てからの足取りも目撃証言もない」

神童 大輔…「それと彼女のパソコンやスマートフォンから一切のデータが抜かれているのと、手帳も中身が抜かれているようだ」

宿利 諒介…「明確に泉さんを狙っていたということか……」

鏡 朋己…「確かに……でもどうして……」

小鳥遊 望…「やはり、昨日言っていたことと関係があるのでしょいか」

皇 甲斐斗…「そういえば、昨日特殊な種について調べるとか言つてたから……もしかしてそこで何か見られてはいけないものを見つけてしまつて証拠隠滅のために殺された……とか……？」

皇 甲斐斗…「泉さんの身体に付着している粉、植物の花粉と形状は似てるけど……こんな種類の花粉は見たことないですよ。」

的場 元…「帳場（捜査本部）が立つだろう。基本的に指揮を執るのは俺になるだろうが、お前達はお前達で動けるように取り計らおう。宿利、しっかりな」

そう言つて的場は宿利諒介の背を叩く。

宿利諒介…「……はい、承知しました」

◆教会周り

都心の中に埋もれた寂れた教会跡地だ。三年前よりも古びているように思うだろう。苔や蔦で覆われたゴシック調のその教会の裏には、硝子のオブジェクトが泉を取り囲んでいる。

これも三年前と変わらない。オブジェは数個壊れてしまっているようだ。泉自体はまあまあ透明だが、草が好き放題に生え茂っている為奥底は見えない。特にこれといって目ぼしいものは無いようだ。

またあの日と同じように『庭師』が現れ、貴方たちは緊張を強めることだろう。

そうしてあなた達はこれから捜査を進めていく事になる――。

捜査本部には多くの長机と椅子が並べられ、大きなホワイトボードが用意されている。三年前の刑事が殺害され、未だ犯人である『庭師』が逮捕されていないという事もあり、大掛かりな本部となっている。進行としての場が話を進め、管理官なども合間合間で何かの指示を出している。鑑識課の猪狩も判明した事について発言しているようだ。『庭師特別捜査本部』と銘打たれたその本部では以下の事が伝えられた。

●内容

- ・泉立夏の足取りについて。
- ・昨晩零課、並びに的場、猪狩、神童と呑み屋から出た後の足取りは不明。帰宅した痕跡はない事から、その帰りの間に殺害された可能性が濃厚。
- ・死亡推定時刻はAM01:00～02:00の間。
- ・彼女の体に付着していた粉については現在猪狩が調査をしているが、現状で言えることは『花粉』であるとのこと。
- ・泉立夏はパソコン・スマートフォン・その他の端末全てを必ず持ち歩いていた。家に置き去りに

したり、自分自身の手の届かない所におくような事はしない。そこを狙われたようだ。彼女はホテルを転々としていた。彼女が昨晚まで過ごしていた部屋からは何も見つかっていない。

・泉立夏の交友関係について

人間関係、恋愛関係に於いてこれといって問題があった訳では無いようだ。彼女自身何かに困っているという情報も上がっていない。

鏡 朋己：CCB $\times$ 90【アイデア】(1D100 $\times$ 90) $\times$ 68 $\times$ 成功

小鳥遊望：CCB $\times$ 60【アイデア】(1D100 $\times$ 60) $\times$ 65 $\times$ 失敗

宿利諒介：CCB $\times$ 70【アイデア】(1D100 $\times$ 70) $\times$ 85 $\times$ 失敗

皇甲斐斗：CCB $\times$ 75【アイデア】(1D100 $\times$ 75) $\times$ 5 $\times$ 決定的成功／スペシャル

確かにそういった悩みなどはないように思える。何かあった時は必ずこちらに話を持ちかけている印象だ。

的場 元：「三年前の『庭師』と同一犯、もしくはその模倣犯であると思われる。今日までその

足取りを掴めていない事を考えると、また逃げられる可能性もある。僅かな情報でも構わない、足と頭を使って捜査をしろ」

そこに付け加える様に、場所が主な段取りを告げていく。零課も指示を出されているようだが、先程の場が言ったように、好きに動いても構わなそうだ。

宿利 諒介 :: 1d100 (1D100) > 74

鏡 朋己 :: 1d100 (1D100) > 83

小鳥遊 望 :: 1d100 (1D100) > 49

皇 甲斐斗 :: 1d100 (1D100) > 23

《H04》：何か違和感を抱く。妙な感覚だ。だが、この感覚に覚えがあるように思えた

宿利 諒介 :: choice[2,3,4] (choice[2,3,4]) > 3

宿利 諒介 :: 「捜査は二人一組で行う。小鳥遊、同行頼む。鏡は皇と。頼んだぞ」

皇甲斐斗…「了解です、鏡先輩よろしくお願いします」

鏡 朋己…「わかりました 皇、行くぞ」(望と一緒にのチームじゃなくてほっとしている)

小鳥遊望…「はい！わかりました！」

皇甲斐斗…「俺たちは先に鑑識課に行きますね、チーフ」

宿利諒介…「ああ、頼む。俺達は資料室に向かう。情報がある程度集まれば合流しよう。」

皇甲斐斗…「わかりました、なにか掴めたら連絡します。」

宿利諒介…頷いてふたりを見送ります

◆鑑識

鑑識課の猪狩のいる一角は良く解らないアニメキャラクターのフィギュアやブロマイドがこれでもかと並べられている。首からヘッドフォンを下げ、鼻歌交じりに彼は作業をしていた。顕微鏡で例の花粉を調べているようだ。

猪狩幸太郎…「やあやあ！全く解らなくて困ってんよー」

そう軽快な口調で告げてくるだろう。

鏡 朋己…「それを調べるのがお前の役目だろうが」

皇甲斐斗…「そうですね……………」ところで何がわからなくて困ってるの？」

猪狩幸太郎…「いやさ〜『花粉』である事は間違いないんだけど、所々人間の細胞に近しいものも
見つかっていて困惑してんだよね〜」

猪狩幸太郎…「しかもあれだけ見た事のある花が咲いていたのに何の『花粉』なのか解らないんだ
よ」

皇甲斐斗…「人間……………！？ その人間の細胞って泉さんの…………？」

猪狩幸太郎…「それがまた変異が始まりだしてて、最初は明確に『泉立夏』のDNAだと判別出
来た死体の状態も、みるみる内に失われていつてる。まるで生きてるみたいなんだよね。」

猪狩幸太郎…「あと零課以外にも刑事は来ていたように思うけど、その人たちにも同じような内容
は伝えているよ。」

鏡 朋己…「DNAが変化するなんてことありえるか…………？」

猪狩幸太郎：「そうそう！なんなら見てみてよー！」（顕微鏡を指さす）

皇甲斐斗：CCB≧(70) 博物学 (1D100≧70) > 36 > 成功

顕微鏡で改めて見てみると、やはりこんな種類の花粉は見たことが無いように思う。であるのに酷い嫌悪感を覚える。見るに耐えない。

皇甲斐斗：「……………気持ち悪い……………」

鏡 朋己：「何か見えたか？」

皇甲斐斗：「初めて見る形状の花粉です……………何か見ると……………気分が悪くて……………すみません……………」

鏡 朋己：「そうか……………無理するな」

皇甲斐斗：「ありがとうございます……………」

鏡 朋己：CCB≧65 【目星】 (1D100≧65) > 85 > 失敗

皇甲斐斗：CCB≧(50) 目星 (1D100≧50) > 8 > スペシャル

殺害現場の写真がホワイトボードに貼り出されている。そんな中丁度写真一枚分のスペースが空いている事に気付ける。

皇甲斐斗…「猪狩、あそこのホワイトボード」

猪狩幸太郎…「ん？　なんか気になる事でもあった？」

皇甲斐斗…「いや、スペースが空いているから……写真とか貼ってあった？」

猪狩幸太郎…「あれ？」

猪狩幸太郎…「なんでだー？　全部印刷したんだけどなあ。まあゲラあるからいいけどさ」

○泉立夏の全体写真

現場で見たままの状態で映っている。特に目ばしいものは見付かっていない。花も全て綺麗な色彩で写真に残っている。

猪狩幸太郎…「そういえばさ。昨日アンタらに何か言おうと思ってた事思い出したんだよね。三年

前何かアンタ達捜査してなかったっけ？しかも俺にも内緒！ つめたー！」

鏡 朋口：CCB $\times$ 90【アイデア】(1D100 $\leq$ 90) $\times$ 92 $\times$ 失敗

皇 甲斐斗：CCB $\times$ (75) アイデア (1D100 $\leq$ 75) $\times$ 29 $\times$ 成功

記憶にない。記憶にない筈だが、何か調査していただくか？思い出せない。

皇 甲斐斗：「たしかに何か調査していたような……………なんでしたっけ……………鏡先輩……………」

鏡 朋己：「……………」

皇 甲斐斗：「あつ……………いや……………俺も思い出せないんで……………大丈夫ですよ……………!!」

皇 甲斐斗：「一応チーフと小鳥遊にも後で聞いておくよ」

猪狩幸太郎：「まあきつとその捜査以上の事が起きちゃったから、思い出せないんだよな。悪かった悪かった。」

猪狩幸太郎：「あー！アンタら結構秘密裏に動いたりしてたし、これからも俺に内緒で色々やるんだよなー！……………はあ、仕事すんね」

猪狩はいじけたようにそう言って、鑑識の仕事に戻ってしまうだろう。

◆資料室

資料室に向かうと、神童が書類を読みながら考え込んでいる姿が見える。三年前の事件のファイルを漁っているようだ。

宿利 諒介：CCB≧65【目星】(1D100≧65)≧77≧失敗

小鳥遊 望：CCB≧70【目星】(1D100≧70)≧1≧決定的成功／スペシャル
何かを仕舞ったように思う。ビニールに入った透明の錠剤のようだ。

小鳥遊 望：「ん？」

小鳥遊 望：「神童さん、今何をしましたんですか？」

神童 大輔：「……ん、居たのか。いや気になるな、大したものじゃない」

宿利 諒介：「何か見たのか？」と小鳥遊にだけ聞こえるように耳打ちします

小鳥 遊望：「なんか錠剤のようなものが見えた気がしたんです」（こっそり返します）

宿利 諒介：それを聞いて静かに頷きます

宿利 諒介：「不躰に入って失礼しました、捜査のために資料を確認しにきた次第です」

神童 大輔：「そうか。俺は少し何かないかと思ってもう一回資料を洗い直しをしている所だ。な
んせ『庭師』が現れたのが三年前だからな。」

宿利 諒介：「一緒に探してもいいですか」

神童 大輔：「ああ」

宿利 諒介：CCB≧60【図書館】(1D100≧60)＞46＞成功

小鳥 遊望：CCB≧30【図書館】(1D100≧30)＞60＞失敗

ふ、と目にとまるファイルがある。何度か手に取った筈なのだが、まるで初めてみたかのよう

な感覚に襲われるのは何故なのだろうか。

『庭師による猟奇殺人事件』『人花教（じんかきょう）狂信者』という二種の書類が見付かる。

●『庭師による猟奇殺人事件』

三年前の日付、文責などが記載された上で、以下のように書かれている。

桜井咲風刑事が発見されたのは早朝。教会跡地にて植物などで吊るされており、腹部には深い切り傷があった。死因は失血死である。尚、第一発見者は警視庁特殊犯罪捜査零課、宿利班の総勢四名である。桜井の死体損傷は激しく、特に顔は判別できない程花や蔦で歪んでいたが、状況証拠からして、桜井咲風本人であるとされた。死後五〜六時間経過しており、冬の気温だと言ったのに細胞の崩壊が激しく、詳しいDNA調査などはされていない。当初、宿利班は精神不安定な状態であり、すぐに話を聴くのは不可能であった。少々の時間を経た後、調書を取ったが、上記班の精神面は芳しくなく、また再度の取り調べが必要だと思われる。以上。

宿利諒介：CCB≧70【アイデア】(1D100≧70)≧69≧成功

小鳥遊望：CCB≧60【アイデア】(1D100≧60)≧23≧成功

覚えていない。確かに取り調べは受けた記憶がある。しかしそれは一回きりだ。「再度の取り調べ」を受けたという記憶はないように思える。

●『人花教狂信者』

『庭師による猟奇殺人事件』の元、あるカルト教団が浮上。『人花教』という自然帰依、植物回歸を目的とした教団である。彼らの目的は、「人間の安らかな死」「自然のままの終わり」であり、死体を花で包む、もしくは死体を苗床に花を植えるという行為をしているようだった。教団員は皆、入団の儀式として首元に小さな穴を開け、そこに種を埋め込むようにと教えられていた。

儀式自体は強制では無いようで、自身が「埋めたい」と思った種を選ぶまでは猶予を与えられるらしい。このカルト教団は予てより薄暗い話題が多く、失踪者も多く出ていた。その失踪者の内の一人と接触し、よく表舞台に出ていた重要参考人が『南玲子(みなみれいこ)』である。

彼女の住まいは『●●都○○区××××××××××』であるが、2XXX(三年前)より消息は不明で

ある。彼女のアパートは調査が入ったが、驚くほど何も無く、彼女と共に消えてしまったカルト教団も現在捜査中である。

《H03》：『南玲子』という名前に既視感を覚える。この名前は何故かずっと自分に纏わりついていて、まるで呪詛のように張り付いて離れない様なもののように思える。

「玲子、玲子」と絶叫するように叫ばれ続けていた名前のように思う。誰の、声だったか。そうだ、鏡自己の声だ。どうして忘れていたのだろう。

同時に刺すような痛みと恐ろしさが背を撫でてくる。　　〈SANC0/1〉

《H03》：小鳥遊望：CCB≧65【SAN値チェック】(ID100≧65)≧73≧失敗

「小鳥遊望」SAN：65→64

小鳥遊望：「(ともちゃん……うっ?)」

宿利諒介：CCB≧65【目星】(ID100≧65)≧42≧成功

小鳥遊望：CCB≧70【目星】(ID100≧70)≧4≧決定的成功／スペシャル

「小鳥遊望」CT: 1 → 2

宿利諒介: CCB≧70【アイデア】(ID100≧70)≧73≧失敗

小鳥遊望: CCB≧60【アイデア】(ID100≧60)≧44≧成功

文章が敷き詰められたその書類に、不自然な開きが見付かる。そこには恐らく『南玲子』という人物の顔写真が入っていたのだろう。頁を捲ってみても、他を探してみても、その写真は見付からない。調査資料に関して、署内のパソコンで一部閲覧できることに気が付く。しかし、閲覧レベルがあり、物によっては調べられない事も思い出すだろう。

宿利諒介:「重要参考人の写真がない……」

小鳥遊望:「南玲子……聞いたことがある気はしますが、思い出せませんね……」

宿利諒介:「小鳥遊、記憶違いだったら悪いんだが」

宿利諒介:「三年前の事件に関して取り調べは再度、俺達は受けていたか？」

小鳥遊望:「いえ、一回きりだったと思います」

宿利 諒介 …「そうだな。この資料は……まあ、そのつもりで書いたのだろうか……」

小鳥遊 望 …「神童さん、三年前取り調べを一度受けたと思うのですがこの、『再度の取り調べ』を受けた記憶がないのですが……」

神童 大輔 …「……ん？しかし調書には再度取り調べがあつたと書かれていたんだろ？」

小鳥遊 望 …「そうですが……」

宿利 諒介 …「一度しか受けた記憶がないのです。確かに当時の我々は憔悴していたため、記憶が曖昧な部分もありますが……」

小鳥遊 望 …「どつちも忘れるなんてあるのかな……」

宿利 諒介 …「やはり実際なかつたんじゃないのか……？ふたりと合流した時に一応確認をとろうか……」

小鳥遊 望 …「そうですね」

宿利 諒介 …「……何もない、と書かれているが今こうして事件があつた以上、重要参考人のアパートを調べてみるのも策かもしれないな」

小鳥遊 望 …「そうですね。他の二人と情報共有がてら合流してから行きますか？」

宿利諒介…「そうしよう。行くぞ小鳥遊。神童さん、我々は失礼します。」

神童大輔…「ああ」

◆零課

それぞれのデスクと仮眠室が設置された程々に大きなオフィスとなっている。自身で何か調べものをする際は、自分のパソコンを利用していいだろう。

パソコンで警察内部の情報を調査する場合、閲覧レベルに達していないものの資料に関しては「普通ならば」調べる事は出来ない。誰にも悟られず情報を閲覧するには、それなりの技術が必要になる。

小鳥遊望…「ただいま！」

鏡 朋己…「声がでかい」

皇甲斐斗…「おかえり」

宿利諒介…無言で入室

小鳥遊望…「そっちはどうだった？」

小鳥遊望…かくかくしかじか

宿利諒介…小鳥遊にかくしかを全任せする

◆零課・宿利のデスク

《HO1》:『ゼロ』結成当時の写真が飾られている。その裏には、何故か指輪が貼り付けられている。

《HO1》:宿利諒介: CCB<=65【目星】(ID100<=65)>75>失敗

《HO1》:宿利諒介: CCB<=85【幸運】(ID100<=85)>71>成功

《HO1》: 貴方は指輪を落としてしまう。しかしその時気づく僅かに血痕が付着している。指輪の裏には0229と彫られているようだ。貴方はこれが『桜井咲風』のものだと解る。二月二十九日は彼女と付き合い始めた日だ。だが何故ここにあるか思い出せない。

《HO1》: 宿利諒介………はがして持ってもいいですかね……

◆零課・鏡のデスク

《HO2》…引き出しの奥から誰かの写真が見付かる。女性のように裏を見れば『人花教 教団重要参考人／南玲子』と書かれている。

この顔に覚えがある。本当に微かな類似点でしかないが、

あなたは直感する事だろう。これは、自分の妹だ。

ずっと探していた妹の情報が目の前にある。しかも「重要参考人」として。

生き別れた妹はその異常なカルト教団に属して

いる可能性が高いようだ。

＜SANc0/1＞

《HO2》：鏡 朋巳：CCB×=63

【SAN 値チェック】(1D100×=63)×49×成功

鏡 朋巳：(少し体調悪そうに下を向きます)

皇甲斐斗：「鏡先輩？どうかしたんですか……？」

鏡 朋巳：「ああいやなんでもない……大丈夫だ」



皇甲斐斗：「……そうですか……………」

◆零課・小鳥遊のデスク

《H03》：机の書類を整理してみると、ころりと何かが転がる。葉莢（やつきよう）のようだ。

《H03》：小鳥遊望…持っておきます

《H03》：小鳥遊望…次、さなちゃんの机みたいです

◆零課・桜井のデスク

《H03》：小鳥遊望：CCB≧70【目星】(ID100≧70)＞67＜成功

《H03》：奥の方に手帳のようなものがある。

《H03》：

『桜井咲風の手帳』

中には日記のようなものが書かれており、日々の零課での事を書き記していたようだ。内容は取り留めの無いものばかりだが最後の方、彼女が死んだ前日の日記が目に残る。

○月○日

もうすぐ私たちが付き合っただいぶ経つしそろそろ結婚とか切り出してもいいかな？まだ早いな？それに女からプロポーズだなんてやっぱちょっと恥ずかしい気もするし。いや！でも自分からぐいぐい行かないとだめだよ！私も望ちゃんみたくびしっと決められるかっこいい女の子にならないと……！

そうだ、明日にでも望ちゃんに相談してみようかな？でも今まで内緒にしてたから驚かせちゃうかな。でも相談できるのなんて望ちゃんくらいだし……うん、頑張ってみよう！

《H03》…小鳥遊望…「(さなちゃんには、恋人がいたんだ……。そうだね、あんなに可愛いんだから……)」

《H03》…小鳥遊望…「(私じゃ、幸せにできない。これは、ずっとわかってた。だから、仕方ない)」

《H03》…小鳥遊望…持つていきたくないけど持つていきます

◆零課・皇のデスク

《H04》…引き出しの中にボロボロの冊子が入っている。

何かの植物について書かれた資料のようだが、くしゃくしゃであったり破られていたり、線が引かれてゐる為読む事は出来ない。

《H04》…皇 甲斐斗…目に入らないように奥に突っ込んでおきます

鏡 朋田：CCB≧81【ランピューター】(1D100≧81)＞9＞スペシャル

・『南玲子の顔写真』↓画像が数枚出てくる。その内の一枚を拡大すれば、物静かそうな女性がそこには映っていた。

・『死刑囚02417・02927その他NOの特別執行について』

↓通常、死刑執行は複数人の目がある中で行われるが、例外が数人上がっているらしい。自身が調べた死刑囚の名前もある。この人々はいったどこに消えたのか。

・『死体安置所の立ち入り記録』

↓何人かの警察関係者の名前を見つけるが、頻繁に名前が挙がっているのは猪狩、神童、的場、

そして『ゼロ』の面々のようだ。】

鏡 朋己：CCB≧90【アイデア】(1D100≧90)＞27＞成功

皇甲斐斗：CCB≧(75)アイデア(1D100≧75)＞10＞スペシャル

小鳥遊望：CCB≧60【アイデア】(1D100≧60)＞57＞成功

宿利諒介：CCB≧70【アイデア】(1D100≧70)＞46＞成功

何かの、いや、誰かの調査の為に安置所に向かったような記憶がある。しかしうまく思い出せない。

小鳥遊望：「ううん……」

鏡 朋己：CCB≧65【目星】(1D100≧65)＞85＞失敗

小鳥遊望：「ともちゃん、さなちゃんの机見てるの？」

鏡 朋己：「何か今からでもわかることがないかと思っただけ……」

宿利諒介：「小鳥遊、代わりに見てくれないか」

小鳥遊望：「あーいや、実はさっきなにかないかなって調べたんですけど……。何もなくて

……」

皇甲斐斗：「そっか……もう遺族の方とかに片付けられちゃったのかな……？」

宿利諒介：「本当に何もなかったのか？」

宿利諒介：CCB≧65【目星】(1D100≧65)＞52＞成功

《HO1》：中を確認するが目ぼしいものは特に見当たらない。

《HO1》：宿利諒介：CCB≧65【目星】(1D100≧65)＞40＞成功

《HO1》：何かに貼られていたのが落ちたのかフセンが隅の方にあるのを見つける。

『プロポーズは付き合った記念日と同じ日に決行！』と書いてある。

《HO1》：貴方なら彼女の筆跡だとすぐわかるでしょう。

《HO1》：宿利諒介：とりあえず自分は隠すと思うので、しゃがんで探してたことにして幸運に

成功したら机に頭ぶつけてお茶を濁したいです

《HO1》：宿利諒介：CCB≧85【幸運】(1D100≧85)＞82＞成功

宿利 諒介：しゃがんでた宿利が立とうとして思いつきり机に頭ぶつけます

宿利 諒介：「……」

宿利 諒介：「なにも見なかった、いいな？」

皇 甲斐斗：「チーフ!？」

鏡 朋己：「……」

小鳥遊 望：「だ、大丈夫!?!？」

「宿利 諒介」HP：13→12

宿利 諒介：「……いいな……?」

皇 甲斐斗：「いやいや、大丈夫ですか!?! 手当しますよ」

皇 甲斐斗：CCB≧(70) 医学 (1D100≧70) < 82 < 失敗

皇 甲斐斗：「すみません、よくわかりませんでした……」

宿利 諒介：「いい、かまうな…… (頭さすりながら)」

小鳥遊 望：「よしよし……」

宿利 諒介：CCB≧85 【幸運】 (1D100≧85) < 6 < スペシャル

宿利諒介・・・・・かまうなと言っているだろう……」

皇甲斐斗・・「そ、そういえばなにか見つけましたか……？」

宿利諒介・・「いや、それが小鳥遊の言った通りだ。くまなく見た結果だ（頭さすりながら）」

鏡 朋己・・「まあさすがに三年も前だからな 何も残っていないだろう」

皇甲斐斗・・「そうですね」

宿利諒介・・「思えば当たり前のことだったな、小鳥遊、疑ってすまなかった」

小鳥遊望・・「みんなで見た方が良かったですから！」

小鳥遊望・・「みんな……ごめん。まだ、出せそうにないや」

◆ 零課・資料保管庫

今まで調べていた資料などが並べられてあるが、常に使っている為そこまで珍しいものがある

ようには感じられない。けれど、どこか頭の奥で何か引つかかっているような感覚を覚えるだろう。

鏡 朋己： $CCB \times 65$ 【目星】 $(1D100 \times 65) > 15$ > 成功

宿利諒介： $CCB \times 65$ 【目星】 $(1D100 \times 65) > 38$ > 成功

小鳥遊望： $CCB \times 70$ 【目星】 $(1D100 \times 70) > 69$ > 成功

皇甲斐斗： $CCB \times (50)$ 目星 $(1D100 \times 50) > 97$ > 致命的失敗

皇甲斐斗： $1d6$ $(1D6) > 1$

1…肩がやたら重く感じる。疲労だろうか………次の技能-10%

資料の並びが狂っている書棚がある。気になり、そこを調べてみれば、奥には小さな金庫が隠されていた。どうにも記憶には無い。パスワードは四桁の数字のようだ。

鏡 朋己：「こんな金庫あったか？」

《H01》…宿利諒介…勝手に0229つて入れてもいいです？

《H01》…みんなに入れているのは見えちゃうけども

《H01》…宿利諒介…無言でやります

金庫の中には『被疑者Xについて』と書かれた簡易的な書類が入っているだろう。

●『被疑者Xについて』

日付は丁度三年前となっている。所々に宿利諒介、鏡朋己、小鳥遊望、皇甲斐斗の名が記されていた。誰が主立って書いたかは解らない様に態々そうしているようだ。

Xは重度の死体愛好の癖があるようである。殺人事件の調査の最中、数枚写真が抜かれている事も確認されている。更には、妙なカルト教団と内通し何人かの遺体も渡しているようだ。

遺体に関しては、未だ状況証拠のみとなっている為、実際渡している現場を押える必要があるだろう。

また、これは警戒すべきかは解らないが、Xは何らかの方法で人の行動を操っている節がある。所謂マインドコントロールなどのそういったものではなく、もっと不可思議なものだ。

説明が非常に難しい。

現に、こうして調査している中でもところどころの抜けを感じてしまう。これの対処方法が解らない為、何か怪しい行動をした際はそれも記載していく。

皇 甲斐斗…「チーフ、この金庫ってチーフのだったんですか？」

宿利諒介…「俺の……？ いや……俺は記憶にある数字を入れただけだ。金庫は此処の物だろう」

小鳥遊望…「なんていれたんですか？」

皇 甲斐斗…「俺何も覚えてませんでした。パスワードっていくつかでしたか？」

宿利諒介…「……」

小鳥遊望…「チーフ……？」

皇 甲斐斗…「……？」

宿利諒介…「0229」

宿利 諒介：「お前らに言ってもわからんだろ」

宿利 諒介：「大事なのはそこじゃない。資料だ。パソコンで書かれている以上誰が書いたものかはわからんが……」

皇 甲斐斗：「あ、そうですね……そういえば、猪狩が三年前に極秘で宿利班が捜査してたのかなとか言っていたのってこれのことですかね……？」

鏡 朋己：「そういえば言っていたな。……少なくとも俺はこのような調査をした記憶はないが」

皇 甲斐斗：「俺もです……そもそもどうしてこれを極秘で調べていたのかすら……」

皇 甲斐斗：「身内に教えられない事情でもあったんですかね……？」

鏡 朋己：「チーフたちが言っていた三年前の取り調べのことも記憶にないな。……三年前の記憶がところどころぬけているような……」

宿利 諒介：CCB×70【アイデア】(ID100×70)×46×成功

小鳥遊 望：CCB×60【アイデア】(ID100×60)×36×成功

記憶にない。記憶にない筈だが、何か調査していただろうか？ 思い出せない。

宿利 諒介…「調査……していた……、何か調査していたのか……？それすらうまく思い出せない

……」

小鳥遊 望…「ううーん……私も思い出せないですね……この資料にもある通り人を操っているのか……」

鏡 朋己…「花粉やらDNAやら……本当にオカルトじみているな」

宿利 諒介…「曖昧な状態で説得力に欠けるかもしれないが、なぜ極秘で調べていたのかは、わかる」

鏡 朋己…「え？」

小鳥遊 望…「え？」

皇 甲斐斗…「え？」

宿利 諒介…「……おそらくだが、他にも漏れないように調べていた理由……」

宿利 諒介…「『庭師』は……『警察署内の関係者の誰か』の可能性が高い……」

宿利 諒介…「だから俺達は極秘で捜査することを決めた。そこは覚えている」

皇 甲斐斗…「たしかに写真を抜き取れるのも内部ぐらいしかない……」

皇 甲斐斗…「そういえば……さっき見た鑑識課のホワイトボードに貼ってあった死体の写真も抜き取られていました……」

小鳥遊望…「なるほど」

宿利諒介…「ふざけた話だ。この状況を面白がっている奴がいる」

鏡 朋己…「これは昔の通り、極秘で調査を進めた方が良いでしょう」

皇 甲斐斗…「（頷く）」

鏡 朋己…「この4人なら、漏れることもないし信頼できるだろう」

宿利諒介…「頼りにしてるぞ」

小鳥遊望…「そうですね……!! 私達なら大丈夫です!!」



皇甲斐斗…「どうしたんですか？」

小鳥遊望…「なんでしょうか?!」

宿利 諒介…「所々俺達の記憶が曖昧になっているのも気がかりだが、この資料（『被疑者Xについて』）はおそらく俺達の誰かが書いてると信じて話す。」

宿利 諒介…「この資料にある『人を操る不可思議な行動』が起きた時の話だ」

宿利 諒介…「ここにも書いてあるように警戒すべきかどうかは俺にもまだ明確に判断がつかないが、起きないと言い切れない。現に事件がオカルト的だというのなら尚更」

宿利 諒介…「四人いる中のひとりだけ操られるならまだわかるかもしれないが、この先も調査は一人で行動する予定だ。その時に起きたら非常に厄介で、尚且つ危険だ。」

宿利 諒介…「ただ、正気であれば質問に答えられるはずだ。俺達にしかわからない質問と返答……所謂、合言葉のようなものを用意しておくのはどうだろうか」

宿利 諒介…「難しくない、むしろ非常に安易で俺達以外からは調べようのないもので、どうだろうか」

鏡 朋己…「良いアイデアだと思います」

皇 甲斐斗…「そうですね！俺も賛成です！」

小鳥遊望…「ふんふん、なるほどー!!」

宿利諒介…「では、お前たちに質問する。」

宿利諒介…「俺の誕生日はいつだ？」

宿利諒介…「(こんな難しい顔されると思わなかったな……)」

鏡 朋己…「十二月二十四日です」

皇 甲斐斗…「二月二十九日」

小鳥遊望…「九月十五日!!」

宿利諒介…「……」

宿利諒介…「……二月二十九日だ」

鏡 朋己…「……」

小鳥遊望…「(ふん……)」

皇 甲斐斗…「覚えてますよう！ ちゃんと」

宿利諒介…「まあ、早い話それにしたいんだが、誕生日と言われると警察である以上データベース

スにはある」

宿利 諒介 …「だから、怪しいと思った時、誕生日と聞くんじゃなくて」

宿利 諒介 …『俺（宿利）にとって最も大切な日は？』と問いかけるんだ。」

宿利 諒介 …「そんなものはこの世のどこにも乗らないデータだからな」

皇 甲斐斗 …「なるほど、わかりました！」

宿利 諒介 …「……………そんなところだ」

鏡 朋己 …「わかりました」

小鳥遊 望 …「なるほど〜!!」

宿利 諒介 …「そして、たとえばどんな状況でも正気である以上は聞かれたら答えろ、相手のためにも」

鏡 朋己 …「はい」

小鳥遊 望 …「ともちゃん大丈夫？？」

鏡 朋己 …「大丈夫だっ」

小鳥遊 望 …「かわいいねえ〜」

鏡 朋己 …「…………」（望から距離をとる）

皇甲斐斗…「ニコニコ」

小鳥遊望…「なんで逃げるの！！！？？」

宿利諒介…「咳払い」

宿利諒介…「……続けるが。相手の反応を見て危険だと思ったら班員のスマホに連絡を入れろ。話せる状況でなければ、切らずにかけ続けろ。いいな。」

皇甲斐斗…「わかりました」

鏡 朋己…「はい」

小鳥遊望…「了解です！」

宿利諒介…「各自伝えておきたいことはあるか？なければまた二手に分かれて捜査するが」

小鳥遊望…「私は特にはないです！」

皇甲斐斗…「俺も無いですね」

鏡 朋己…「俺も特にはありません」

宿利諒介…「俺は小鳥遊と南玲子のアパートに向かう。人是他任せていいか」

鏡 朋己…「了解です」

皇 甲斐斗：「大丈夫ですよー！任せてください」

小鳥遊 望：「二人とも、気をつけてねっ！」

皇 甲斐斗：「ありがとう、望ちゃん達も気をつけてね」

鏡 朋己：「宿利さんに迷惑かけるなよ、望」

小鳥遊 望：「チーフは私が守るから大丈夫だよー!!」

◆本部

捜査本部は殆どの刑事達が外に出てしまっているようだ。しかし的場はホワイトボードの前で静かに情報を整理している。彼の部下である神童の姿はない。

鏡 朋己：CCB≦65【目星】(1D100≧65)＞80＞失敗

皇 甲斐斗：CCB≦(50)目星 (1D100≦50)＞11＞成功

何か紙のようなものを懷に仕舞ったように思う。

鏡 朋己…「的場さん」

的場 元…「ん、お前たちか。どうだ調子は」

皇甲斐斗…「的場さん、おつかれさまです」

鏡 朋己…「捜査に難航していて……何かそちらで新しい情報などわかるものはありますか？」

的場 元…「残念ながら目新しいものはないな。」

皇甲斐斗…「そうですか……今は何をされていたんですか？」

的場 元…「俺はもう少し状況を整理している所だ。それが終わったら神童と共に調査しようと思っている。」

皇甲斐斗…「的場さん、今ポケットに何か隠してるように見えたんですけど、俺の気のせいですか？」

鏡 朋己…「！」

的場 元…「ああ、家族の写真だ……。」

の場 元…「すまないが照れ臭くて見せられないぞ。別れた家族だから………」

皇甲斐斗…「的場さんのご家族って……」

の場 元…「昔の話だ………あまり掘り返すようなことじゃないさ。」

の場 元…「それよりも、お前らもサボってないで捜査頼んだぞ」

皇甲斐斗…「そう………ですか………」

皇甲斐斗…「そうですね………この後教会に行く予定でしたね！」

鏡 朋己…「わかりました 失礼します」

鏡 朋己…「……皇、何か気になることが？」（小声で言います）

皇甲斐斗…「……俺もしっかりは見えなかったんでわからないんですけど、何か俺たちに見せたくないものでも隠したのかな、って……」

皇甲斐斗…「チーフがさっき言ってた内部の犯行って話を聞いてから、何もかもが怪しく見えてしまっ……」

鏡 朋己…「お前の言うことも分かるが……まあ別れたと言っていたしな ……家族のことなら言えないこともあるだろう」

皇 甲斐斗 : 「そうですね……………すみません…………」

鏡 朋己 : 「教会に向かうか」

皇 甲斐斗 : 「ですね」

鏡 朋己 : $CCB \times = 65$ 【目星】 $(1D100 \times = 65) > 22 > 成功$

皇 甲斐斗 : $CCB \times = (50)$ 目星 $(1D100 \times = 50) > 45 > 成功$

帰り際、場がタブレットケースを見詰めている姿が見える。中身は錠剤なのか何なのか解らないが、遠巻きに見て色が無い透明に近い色のもののように思える。

◆南玲子のアパート

そこは質素なアパートだった。前もって得ていた情報の通り、警察が調べきつた部屋なのだろう。というより、驚くほど調べられる場所が無い。引き出しを開けようとも、押入れを覗こうにも、物がないのだ。あるとすればベランダで枯れ果てた花と大きな植木鉢程度。彼女が此処で暮らしていたかどうかすら怪しい場所だ。

小鳥遊望・・「……なんだか怪しいですね。なにも、ない」

宿利 諒介・・「まあ、一度捜査が入っていることもあるし、消息を絶っているということは何も無いのも頷けるが……」

枯れた花を引き抜き、土を掘っていくと、ビニールでぐるぐるにパッキングされた何かが現れる。それを破って中身を出してみると、手帳と、小さな鍵が入っていた。

小鳥遊望・・「すごい」

宿利諒介・・「……確認するぞ」

●小さな鍵

何かの鍵なのだろう。小さく花の文様が入っている。鍵と一緒に何かきらりと光るものが落ちた。半透明の欠片で、米粒程度の大きさしかない。中から何かが割れて出てきたように、真ん中で真つ二つに分かれている。

小鳥遊望・・「鑑識で調べられますかね？」

宿利諒介・・「……そうだな。詳しい奴に頼むのがいいだろうな」

●手帳

彼女の手帳のようだ。最初こそ整然と書かれていた日記だが、最後に記載されているのは人花教の教えか何かだろうか。

○月○日

兄は見付からない。

何処に行ってしまったんだろう。

ずっと探しているのに。何処にも見つからない。

○月○日

教会の人々が、兄は死んだと言ってきた。

花になったのだと言った。

とても綺麗な花を渡してくれた……………。

本当に兄はこうなってしまったの？

何て……………綺麗なんだろう。

○月○日

植物について研究しているという刑事に出会う。

興味本位で「例の種」を渡した。

珍しいといって喜んで持ち帰ってくれた。

○月×日

数か月後になって、あの刑事が種を渡してきた。

半透明で美しい種だった。

「一つは同僚の女性にあげた」などと言って笑っていた。

私に埋める種はこれにしよう。とても美しい。

――
嗚呼、我らが祖にして、麗しき花ヴルトウム

その甘き香りの前では誰もが魅了され

その美しさの前では全てが平伏すだろう

我らが意志もその下に

御身の御心のままに

彼岸で咲く一輪の花となり

未来永劫あなたに仕えよう

小鳥遊望：CCB $\times$ 5【親からもらったオカルト】(1D100 $\leq$ 5)>24>失敗

宿利諒介：CCB $\times$ 5オカルト初期値(1D100 $\leq$ 5)>14>失敗

宿利諒介：「……刑事とつながってるな」

小鳥遊望：「そうですね、やはり内部の人間……」

宿利 諒介 …「得たものは班で共有するでしょう。」

小鳥遊望 …「そうしましょう」

小鳥遊望 …「少なくとも二人はこの種について知っている警察内部の人間がいるんですね。」

宿利 諒介 …「そうなるな。黙っているか、欺いているか、だ」

小鳥遊望 …「……許せないな」

宿利 諒介 …「……死後は同じような状態だったかもしれないが、泉さんは首を一突きされていた。桜井は……腹部を深く切り裂かれていた。」

宿利 諒介 …「なあ小鳥遊」

宿利 諒介 …「なぜ桜井は殺されたんだろうな」

宿利 諒介 …「誰に恨まれるような人間でもなかったはずだ」

小鳥遊望 …「さなちゃんは………」

小鳥遊望 …「……長年付き合っていた人がいたようです。その線かもしれません。」

宿利 諒介 …「……そんな恨みごとで殺されていいのか？ そんな稚拙な」

宿利 諒介 …「そんな理由で、桜井が……」

小鳥遊望 …「わかりません……。」

宿利 諒介 …「小鳥遊は桜井と、仲が良かったんだよな。違ったか？」

小鳥遊望 …「はい。私にとって……一番仲が良かった、です」

宿利 諒介 …「何か相談されなかったのか？誰かにつけられていたとか、……もう、全て過ぎた話になってしまいが」

小鳥遊望 …「それが、わからないんですよね。」

小鳥遊望 …「………なにせ私もさなちゃんに恋人がいたことを知らなかったですから。」

小鳥遊望 …「(さなちゃん……どうしてずっと黙ってたんだろう……。)」

宿利 諒介 …「そうか。聞いてすまなかった。」

宿利 諒介 …「桜井は小鳥遊にも負けず劣らず体術や防衛能力に長けていた。警戒心も強かったはずだ。そんな桜井がああなるなど……。」

宿利 諒介 …「……すまない。戻ろうか」

小鳥遊望 …「そうですね……」

鏡 朋己 :: 1d100 (1D100) > 88

小鳥遊 望 :: 1d100 (1D100) > 70

宿利 諒介 :: 1d100 (1D100) > 47

皇甲 斐斗 :: 1d100 (1D100) > 57

《HO1》・《HO4》:: 厭なものが迫っているような感覚だ。けれど、何処かそれを待ちわびているような気がする

◆教会

早朝に現場を見た時と殆ど同様の状態だった。異なる事とすれば、見張りをしている警察官だけが立っているという状態である事、またその分見晴らしがよくなっているという事だ。

●泉立夏の遺体発見現場

植物の蔦や、花卉が未だ残っている。天井や壁からそれらが伸びていた訳ではなく、本当に彼女の遺体から植物が生い茂っていたようで、建物などには苔程度しかこびりついていない。

鏡 朋己 : $CCB \times = 65$ 【聞き耳】 ($ID100 \times = 65$) > 71 $\times$ 失敗

鏡 朋己 : $CCB \times = 65$ 【幸運】 ($ID100 \times = 65$) > 49 $\times$ 成功

皇甲斐斗 : $CCB \times = (70)$ 幸運 ($ID100 \times = 70$) > 98 $\times$ 致命的失敗

皇甲斐斗 : $CCB \times = (60)$ 聞き耳 ($ID100 \times = 60$) > 49 $\times$ 成功

皇甲斐斗 : $Id6$ ($ID6$) > 5

5 : なんだかめっちゃド忘れした。なんだったつけ……………??? 次の技能-20%

早朝の雑踏がなくなった御蔭か、何処からか妙な風の音が聞こえてくる。窓や扉などからではなく、どうやら足元からのようだ。

皇甲斐斗：「この教会って、地下とかありましたっけ……？」

鏡 朋己：「当時は気が付かなかったが……風が下に集まっている気がするな」

●床

一見すれば誰も気が付かない様な些細な変化のように思う。教会の床に描かれた模様の一部と思えば確かにそうだろう。しかし、それは模様では無く窪みだった。指先で軽く土埃を払えば小さな鍵穴が見付かる。

鏡 朋己：CCB×=90【アイデア】(1D100×=90)×38×成功

皇甲斐斗：CCB×(75-20)アイデア (1D100×=55)×61×失敗

この床の奥を知っているような奇妙な既視感を覚える。

鏡 朋己：「鍵穴……？」

皇甲斐斗：「これ開けられるんですね……………」

鏡 朋己：CCB $\times$ 65【目星】(1D100 $\times$ 65) $\times$ 86 $\times$ 失敗

皇甲斐斗：CCB $\times$ (50) 目星 (1D100 $\times$ 50) $\times$ 94 $\times$ 失敗

鏡 朋己：CCB $\times$ 65【幸運】(1D100 $\times$ 65) $\times$ 39 $\times$ 成功

皇甲斐斗：CCB $\times$ (70) 幸運 (1D100 $\times$ 70) $\times$ 6 $\times$ スペシャル

何かきらりと光るものが見付かる。泉が吊るされていた壁のひびの間にそれがあるようだ。手に取ってみれば、半透明の欠片のようだ。半透明の欠片で、米粒程度の大きさしかない。中から何かが割れて出てきたように、真ん中で真つ二つに分かれている。

皇 甲斐斗 : $CCB \times (70)$ 博物学 $(1D100 \times (70) > 84 > 失敗$
鏡 朋己 : $CCB \times 10$ 【博物学】 $(1D100 \times 10) > 20 > 失敗$
皇 甲斐斗 : $CCB \times (70)$ 博物学 $(1D100 \times (70) > 40 > 成功$
[皇 甲斐斗] CT : 1 → 0

それが、実際何なのかきつと誰にも解らない。けれど、あなたにはそれが何であるか手に取る様に解る。

これは植物の種だ。

どの文献にも、どの資料にもそれが何の植物の種であるかなど解る訳もないのだ。何せこれは自分で生み出した種なのだから。



昔あなたは植物研究サークルに所属し、そこで南玲子に複数の不思議な種を渡された。
見た事も無い種にあなたは魅了され、好奇心から熱心に研究を始める。

奇妙で不気味な事だが、この種がよく育つ姿を

見せたのは人の血を垂らした時だった。

研究に熱中していたあなたは、

それも些細な事と気にしなかった。

そこで偶然にも品種改良に成功した。

その種の見た目が半透明でとても美しかった為、
お礼として二人の女性に渡したのだ。



一人は南玲子。

もう一人は、三年前に植物に塗れて死んだ桜井咲風だ。

彼女の死体の姿と閉じていた記憶からあなたは酷い恐怖心を覚える。

あなたは元々花を愛していた人間だ。 <SANc1d3/1d6>

《HO4》: 皇 甲斐斗 CCB<=70 SAN チェック (1D100<=70)> 14>スプシヤル

《HO4》: 皇 甲斐斗 1d3 (1D3)>2

「皇 甲斐斗」SAN: 70 → 68

皇 甲斐斗:「……植物の種……に見えますね」

鏡 朋己:「種?これが……?」(つまんでまじまじと見ながら)

皇 甲斐斗:「鏡先輩は何か他に気付きましたか……?」

鏡 朋己:「……………」(先程の床を見つめる)

皇 甲斐斗…「とりあえず、この種は持ち帰りましょう。俺が持っていますね。鍵穴は……写真でも撮ってチーフたちに聞いてみましょう」

鏡 朋己…「そうだな、頼む。また後で情報共有しよう」

皇 甲斐斗…「ですね、じゃあ……戻りますか？」

鏡 朋己…「そうしよう ……あまり長居したくはない」

白い息を吐きながら捜査を続けていた面々。明日も早いとの事で、今晩は零課の仮眠室やソファを使って泊まる事になった。

小鳥遊望…「かくかくしかじか！」

宿利諒介…「かくしかを小鳥遊に全任せする」

皇 甲斐斗 : CCB $\times$ (5) オカルト (1D100 $\times$ 5) $\times$ 37 $\times$ 失敗

鏡 朋己：CCB×59【オカルト】(1D100×59)×21×成功

「彼岸で咲く一輪の花」という言葉で思い当たる事がある。『地獄の植物』という植物の事だ。それは人や生物に寄生し、その苗床となるものの死などによって芽吹くらしい。

鏡 朋己：「こののを思い出した」

小鳥遊望：「もしかして……彼岸花？」

皇甲斐斗：「彼岸花……たしかに不吉な花としてよく挙げられますよね」

宿利諒介：「墓の周りに咲くからそういわれてたりもするな」

宿利諒介：「ところでこの欠片、そっちが見つけたものと同じか？」

鏡 朋己：「そちらでも見つかったんですか？ 同じものようですね……」

皇甲斐斗：「同じですね。それは南玲子という女の部屋から出てきたんですね……？」

宿利諒介：「ああ、そうだ。小鳥遊の言った通りだが、植木鉢の中に手帳と鍵と一緒にあった」

皇甲斐斗：「鍵………教会の床に鍵穴があったんですけどその鍵と一致しそうですか？（写真を

見せる)」

小鳥遊望：「どうでしょうか、大きさは……合いそうですね？」

宿利諒介：「鍵の傍、鍵穴の傍に同じような欠片があったとするなら関連性は高いな。明日みにいくでしょう」

宿利諒介：「皇、この欠片、何かわかるか？」

皇甲斐斗：「これは……俺には植物の種に見えますね……」。

皇甲斐斗：「植物の種から芽が出て……真二つになったのかと……」

宿利諒介：「さすがにその植物が何かまではわからないか……鑑識にまわすか」

《HOI》：宿利諒介：「皇くんがほんとにわからないのか、皇くん自身のために黙ってるのか、班員のために黙ってるのか心理学でわかりますか？」

《HOI》：sid100 (ID100) > 37

《HOI》：何か隠しているように感じますね

皇甲斐斗…「鑑識に任せて……大丈夫ですかね……？」

鏡 朋己…「あいつは信用ならん」

小鳥遊望…「まあまあ〜！」

宿利諒介…「猪狩は確か植物に詳しいだろう？ 鏡が何か言ってるが仕事としてはプロだろう」

鏡 朋己…「チーフがそういうなら……」

鏡 朋己…「……南玲子の部屋には本当にこれだけでしたか？」

宿利諒介…「ああ。驚くほど何もなかった。まあ過去に捜査が入っていたしな」

小鳥遊望…「そうですね、これも植木鉢から引き抜いたものですし……」

鏡 朋己…「そうですか……」

鏡 朋己…「そんな乱暴なことしたのかお前」

宿利諒介…「引き抜いたのは俺だがな」

小鳥遊望…「私じゃないもん！チーフだもん！」

宿利 諒介 ……捜査だろうか」

小鳥遊望 ……「そうだよ（便乗）」

鏡 朋己 ……「捜査ならしかたありませんね」

小鳥遊望 ……「……チーフには従順なんだから」

皇 甲斐斗 ……「みなさん、どこか行くんですか？」

鏡 朋己 ……「俺は念の為もう少し資料を漁ってみる」

小鳥遊望 ……「ともちゃん心配だからついていく」

宿利 諒介 ……「俺は先ほど言った通りだ。これ（欠片）を確認する。」

鏡 朋己 ……「お前も来るのか」

小鳥遊望 ……「うん！」

皇 甲斐斗 ……「なるほど……でもあまり夜更しはしないでくださいね、明日も早いんですから」

鏡 朋己 ……「わかった お前もな」

小鳥遊望 ……「甲斐斗さんはここに居るの？」

皇甲斐斗…「うん、明日も早いから俺は早く寝て皆に朝食でも作ろうかな〜！」

小鳥遊望…「わーい！甲斐斗さんのご飯大好きだから嬉しい〜！」

皇甲斐斗…「望ちゃんのために大量に作っておくよ」

小鳥遊望…「ありがとう！」

皇甲斐斗…「うん、じゃあおやすみ」

宿利諒介…「動こうか。鑑、小鳥遊、遅くなりすぎないようにな」

宿利諒介…「俺は少し皇と話してから行く」

鏡 朋己…「はい おやすみなさい」

小鳥遊望…「はい、チーフも鑑識にいくならお気をつけて！」

皇甲斐斗…「えっ……」

宿利諒介…「……疲れるな。犠牲者が増えてしまうなど、考えもしなかった」

宿利諒介…「お前も疲れただろ」

皇甲斐斗…「……………」

皇甲斐斗…「そうだね……………」

皇甲斐斗…「どうしたの？りようちゃん。俺に何か話したいことあるの？」

宿利諒介…「ある。だが明日の宿利班の胃袋をつかまれている以上そこまで長く話すつもりはない。」

皇甲斐斗…「相変わらずだなあ……………どうしたの？」

宿利諒介…「どうしたと聞きたいのはこっちだが、俺は今お前に何か言わせるつもりはない。」

宿利諒介…「カイト」

宿利諒介…「俺はお前を信じてる」

皇甲斐斗…「……」

宿利諒介…「……………だからこそ」

宿利諒介…「俺を、俺達を信じてほしい。」

宿利諒介…「『いまさら何言ってるの？』とか言いそうだが」

皇甲斐斗…「……………本当だよ……………俺はずっとみんなを信じているし、チーフのことだって

……………」

宿利諒介…「……………」

宿利諒介…「……俺は行く。早く寝るんだぞ」

皇甲斐斗…「……ねえ、りょうちゃん」

宿利諒介…「なんだ」

皇甲斐斗…「俺の誕生日、何日か覚えてる？」

《H04》…皇甲斐斗…覚えてるか覚えていないかのダイスを振ってほしいですね

《H01》…宿利諒介…choice[覚えてる、覚えてない](choice[覚えてる、覚えてない])✓覚えてない

皇甲斐斗…「……………ごめんね、なんでもないよ」

皇甲斐斗…「おやすみ」

宿利諒介…「……」

宿利諒介…「おやすみ」

◆夜行動・鑑識

宿利は鑑識課に足を運ぶが、誰も居ない。夜だからみな帰ってしまったようだ。

宿利 諒介 …「……まあ、確かにもう遅いから当然だったな。明日にしよう」

宿利 諒介 …「（……なんでアイツ、鑑識に通すの渋ったんだろうな……）」

【夜行動・資料室】

鏡と小鳥遊は二人で資料室に訪れる。夜の為か誰も居ない。資料を見返してみても目新しいものは何もないようだ。

小鳥遊 望 …「……ともちゃん、体調は大丈夫？」

鏡 朋己 …「……大丈夫だ 何故そんなことを聞く」

小鳥遊 望 …「出かける前、体調悪そうにしてたでしょ？心配で」

鏡 朋己…「ああ……………焦っていたんだ 一刻も早く事件を解決したくてな」

鏡 朋己…「……………」

鏡 朋己…「……………心配かけたな」

小鳥遊望…「……………」

小鳥遊望…「ううん、なにもないなら良いんだけど……………」

鏡 朋己…「お前が一番辛いのもわかつてる」

鏡 朋己…「……………お前も何かあれば、すぐに言え」

小鳥遊望…「……………うん。そう、だね。」

小鳥遊望…「私が一番つらい……………のかな。」

鏡 朋己…「こんな思いをしなくていいように、俺たちが今動かなくてはならん」(気まずそうに

目をそむけ)

小鳥遊望…「……………」

小鳥遊望…「……………ともちゃんは、」

小鳥遊望…「……………やっぱりなんでもない！」

鏡 朋己…「は？」

小鳥遊望…「えへ、聞こうと思つてたこと忘れちゃつた！」

鏡 朋己…「なんなんだお前は……」

鏡 朋己…「まあいい」

小鳥遊望…「うん、気にしないで！……でもね、」

小鳥遊望…「私、さなちゃんのこと大好きなんだー！」

鏡 朋己…「……………ああ」

小鳥遊望…「嘘は、ついてない。そうだよね」

鏡 朋己…「そろそろ帰るか 宿利さんたちに何か言われる前に」

小鳥遊望…「うんー！」

《H03》…「帰り際、鏡が「……………玲子……」と呟いた気がした

◆夜行動・捜査本部

未だ、数名の警察官が夜通し作業をしているようだ。これといって進捗は無いらしい。

皇甲斐斗：CCB≡(50) 目星(1D100≡50)＞37＞成功

報告書などの書類とは別に、床に何か古い紙が落ちているのに気が付く。

『CLOUD MEMORY』と書かれたメモだ。全て英語で書かれている。

皇甲斐斗：CCB≡(55/2) 知識(1D100≡27)＞8＞成功

●『記憶を曇らせる』呪文

この呪文の対象になった者は、ある特定の出来事を意識的に覚えている事ができなくなる。

この呪文をかけるためには1D6マジック・ポイントと1D2正気度ポイントのコストがかかる。

呪文の効果は即時に現れる。呪文の使い手は対象が目に見えていなければならず、対象は呪文の使い手の指示が受け取れるような状態でないといけない。

《H04》: DEX×5でみんなが帰る前に戻れたか判定しよか……（ファンブルチェック）

《H04》: 戻れた！

《H04》: 皇甲斐斗…よし！寝たフリします！

《H04》: ちなみにメモは持っています？

《H04》: 皇甲斐斗…あ……そうですね……自分の懐にしまいたいのです

鏡 朋己: CCB<=65【聞き耳】(1D100<=65)>90>失敗

小鳥遊望: CCB<=70【聞き耳】(1D100<=70)>71>失敗

宿利諒介: CCB<=65【聞き耳】(1D100<=65)>31>成功 外から言い争うような声が聞こえる。

宿利諒介:「……なんだ？騒々しいな」

鏡 朋己:「何か騒ぎですか？」



宿利諒介…「誰かが言い争ってるようだ」

窓の下を見てみれば、署の出入り口で猪狩、的場、神童の三人が何か言い争っている姿が見える。

的場 元…「神童……………疲れているのなら、もう帰って休め。何を興奮しているんだ」

神童 大輔…「……………ッ、的場さん……………さっきの質問の答えを教えてください

……………それだけいい」

的場 元…「俺が家族写真を持っていたらそんなに可笑しいか？」

神童 大輔…「……………家族写真……………？ 貴方、家族なんて……………」

猪狩幸太郎…「ど、どーしたの神童ちゃんも的場ちゃんも！ 神童ちゃん一緒に的場ちゃんの家

族に会った事あるじゃん？」

神童 大輔…「……………？ な、んだ……………？」

的場 元…「……………はあ、やはり疲れているんだ神童。ゆつくり休め、な？」

神童 大輔 …「…………、……………そう、でした……………何で忘れて……………？ いや、……………すみま、せんでした」

神童も的場も、猪狩も酷く動揺している様子だったが、的場は気を取り直したかのように僅かに微笑み、神童の背を叩く。そして労うような言葉を伝えて、そのままその場を去っていつてしまっだろう。神童と猪狩も一言二言何か話してから、各々その場を後にしたようだった。

宿利 諒介 …「……聞こえたか？ ずいぶんと不可解なやりとりをしていたようだが……」

小鳥遊 望 …「的場さんのご家族について話されてたようですが……」

鏡 朋己 …「そういえば的場さん……家族写真を見せてくれなかったな」

小鳥遊 望 …「写真？」

《HOI》：宿利 諒介 CCB≧70【アイデア】(ID100≧70)≧64≧成功

《HOI》：そもそもあまり、そういった話をしたことが無いように思う。だが確か、恐らく、居

たはずだ。よく思い出せない。

宿利 諒介…「的場さんとはあまり込み入った話をしたことがなかったから明確に言えないが……。だが、おそらく家族はいらっしゃったはずだ……。くそ、……うまく思い出せないな……」

鏡 朋己…「そう、ですね……」

小鳥遊望…「神童さんの様子がおかしかったようですが……忘れている……？」

鏡 朋己…「皇も見たよな……おい皇……」

皇 甲斐斗…「!???!?!?!」

小鳥遊望…「ともちゃん乱暴だな!」

皇 甲斐斗…「えっ……えっ!?!?はい!?!?」

鏡 朋己…「かくしかだ!?!」

皇 甲斐斗…「な、なんだってー!?!?」

宿利 諒介…「夜だぞ、静かにしろ」

鏡 朋己…「すみません」

小鳥遊望：「あはは」

皇甲斐斗：「……マインドコントロール………?」

小鳥遊望：「………あつ、そ、そうですね」

小鳥遊望：「可能性はありそうですね」

皇甲斐斗：「………」

宿利諒介：「状況としては、神童さんが的場さんにうまく説き伏せられていたようにも見えたが………まじかな………」

皇甲斐斗：「あの………実は………俺、寝る前にコーヒー飲もうと思つて捜査本部に立ち寄つた時………メモを拾つたんですね………」

皇甲斐斗：「これです」

『CLOUD MEMORY』と書かれたメモだ。全て英語で書かれている。

鏡 朋口：CCB<=70/2【知識】(1D100<=35)>81>失敗

小鳥遊望：CCB≧70/2【知識】(1D100≦35)＞61＞失敗

宿利諒介：CCB≧65/2【知識】(1D100≦32)＞87＞失敗

小鳥遊望：「わからない……」

鏡 朋己：「なんて読むんだこれ」

皇甲斐斗：「えつとですね……………(情報欄参照)」

小鳥遊望：「なるほど〜！甲斐斗さん英語すい〜！」

宿利諒介：「……なんだそれは、ずいぶんと非現実的な内容だな」

鏡 朋己：「もしこれが本当なら、俺たちや神童さんの記憶が曖昧な理由が……？」

小鳥遊望：「一体誰がこんなものを……」

皇甲斐斗：「そうですね……筆跡も男性か女性かわからないんですけど、俺の予想は的場さんのメモなんじゃないかなって……」

皇甲斐斗：「昼に的場さん本部で調べ物をしていたし……」

鏡 朋己：「皇がそう言うなら、その可能性があるだろう」

宿利 諒介…「じゃあ今、的場さんが神童さんにその呪文を使ったということか？にわかに信じがたいが……」

皇 甲斐斗…「今の出来事にも合致する気がします……」

宿利 諒介…「ただ、俺たちの記憶がところどころ曖昧なもの、それが理由だとしたら……」

小鳥遊望…「使ったとしてあの場に猪狩さんもいましたし、ちよつと怪しすぎるような……」

宿利 諒介…「……考えたくはないが、彼がいたとしても的場さんにとつて使える環境だった、という可能性もあるかもしれないな……」

皇 甲斐斗…「それが猪狩にも同様にこの呪文を使えば呪文を使ったことに気付かれませんか」

鏡 朋己…「……頭が痛くなってきたな この呪文のことも、あまり多言しない方が良さそうですね」

宿利 諒介…「……ずいぶんと厄介なものだな。まあ、今俺達が見聞きした情報だけで確信するのは早い。ただ、気を付けておこう」

鏡 朋己…「はい」

小鳥遊望…「そうですね……」

皇甲斐斗…「……………はい」

宿利諒介…「明日も早い。体を少しでも休ませるぞ。」

鏡 朋己…「皇、乱暴に起こしてすまなかつたな」

小鳥遊望…「あはは」

皇甲斐斗…「あはは……」

本当に僅かな睡眠時間であつたが、こうした生活を続けているあなた方にとってはまあまあ深い眠りが出来たというところだろう。もう少し眠ろうか、というところで激しく零課の扉が開かれる。

猪狩幸太郎…「ちよつとお！聞いてよゼロ！！」

猪狩があなた方を起こすように資料で顔や体を叩きながら、何かを喚いている。

小鳥遊望…「なに？！…！！？」

鏡 朋己…「うるさい!!」

宿利諒介…「……猪狩か、どうした」

皇甲斐斗…「猪狩……?」

猪狩幸太郎…「それがさう『庭師』の事もあったからさあ! 三年前のデータも引つ張り出して鑑識してみたんだよねえ!」

猪狩幸太郎…「そーしたらビックリ。今回の遺伝子や細胞の変質も加味して調べ直してみたらさ、三年前の死体、なんかおかしいんだよなあ!」

宿利諒介…「……説明してくれるか」

猪狩幸太郎…「もちろんもちろん!」

猪狩幸太郎…「何がおかしいってさ、女性って事以外解らないってのは元々の見解なんだけど」

猪狩幸太郎…「あれ、桜井ちゃんですらないかもなんだよね」

小鳥遊望…「……え?」

猪狩幸太郎…「とかほほ60%の確率で別人?」

宿利諒介…「……なんだと?」

鏡 朋己：「は？」

猪狩幸太郎：「でもさあ、第一発見者はゼロじゃん？？見間違う訳ないし？？」

猪狩幸太郎：「誰が桜井ちゃんって言ったかしらないけど、これってどーいうことよ」

猪狩幸太郎：「とゆーか、何であそこで皆発見できたのさ？ いー加減秘密は無しだぜ？」

《Hoi》：

一番初めに「桜井」と彼女を呼んだのは自分だ。それは間違いない。けれど何故そう呼んだのだろう。

あれは彼女では無いと、そう告げられた瞬間に、あなたにある光景が蘇る。暗い場所を走っている。恋人と皇 甲斐斗を追って走っていた。その道の先で「桜井咲風」と皇 甲斐斗の悲痛な叫び声、そしてもう一人の影があった。

皇 甲斐斗が泣き叫んでいる。謝っているようだ。その謝罪は桜井に向けられていた。暗がりでも動き、かくりと首を傾けた彼女に無数の花や蔦が生い茂っていく。

耳の端で「美しい」と言う興奮したような声が聞こえていた。

そうだ。何故忘れていたのだろう。いや、何故思い出してしまったのだろう。ちらつく記憶の中で、彼女は吊るされていなかった。横たわっていたのだ。その額に穴を空けた状態で、ただ横たわっていた。

ではあの吊るされた死体を見て、何故自分は彼女の名前を呼んだのだろう。

〈SANC1/1d3〉

《H01》::宿利諒介::CCB<85【SAN値チェック】(1D100≧85) > 95 < 失敗

《H01》::宿利諒介::1d3 (1D3) > 3

鏡 朋己:「それは……そうだが……」

皇甲斐斗:「ま、まって………情報が追いつかないよ……」

小鳥遊望::1d100 (1D100) > 26

鏡 朋己::1d100 (1D100) > 3

皇甲斐斗::1d100 (1D100) > 62

宿利諒介：1d100 (1D100) > 25

自身が抱いていた記憶とのズレを感じる。霧が晴れていくように鮮明になっていく。誰かに操作されていたかのような感覚だ。SAN<0/1

《HO1》：宿利諒介：CCB<=85【SAN値チェック】(1D100<=85) > 16 > スペシャル

《HO2》：鏡 朋己：CCB<=63【SAN値チェック】(1D100<=63) > 36 > 成功

《HO3》：小鳥遊望：CCB<=64【SAN値チェック】(1D100<=64) > 60 > 成功

《HO4》：皇甲斐斗：CCB<=68 SAN チェック (1D100<=68) > 95 > 失敗

「皇甲斐斗」SAN：68 → 67

小鳥遊望：「でも、現にさなちゃんはいなくなってますよね……？」

鏡 朋己：「その通りだ 三年前からずっと……」

皇甲斐斗：「もしのその記憶が……操作されていたら……」

宿利諒介：「……可能性は……大いにある……」

小鳥遊望：「どうということ……？」

皇 甲斐斗 …「三年前の記憶がだいぶ抜けてるんだ、俺たち。何が起きてもおかしくないよ。だから……咲風ちゃんは……何か別の理由で……って可能性も……」

皇 甲斐斗 …「猪狩、昨日の夜の場さんと話してなかった？」

猪狩幸太郎 …「ん、聞いてたの？そーそーなんか神童ちゃんのが場ちゃん問い詰めにいった感じだから俺は止めに入っただけだ」と

猪狩幸太郎 …「的場ちゃん家族写真って言ってるし、そうじゃんね？」

皇 甲斐斗 …「通りがかったらまたま聞こえてさ、猪狩っての場さんの家に行ったことあるの？」

猪狩幸太郎 …「家についていうか家族に会った事はあるはず、………あれ？ん？どうだったっけ？」

猪狩幸太郎 …「てか今は的場ちゃん関係くない？」

猪狩幸太郎 …「そうじゃなくて三年前の死体の話！なんであれが桜井ちゃんだって思ったわけ？」

猪狩幸太郎 …「三年前何か捜査してたのも含めて、いい加減教えてくれないじゃん〜！」

小鳥遊望 …「誰かが……さなちゃんだって……呼んで……それで……？」

皇 甲斐斗 …「そうだね……それで俺達は咲風ちゃんだって……」

鏡 朋己…「そうだ……あれを俺たちは見て……誰かが桜井だと……」

宿利諒介…「……俺だ」

小鳥遊望…「チーフ……？」

皇甲斐斗…「チーフ……でしたっけ……？」

宿利諒介…「あの、吊るされた死体を見て、」

宿利諒介…「桜井だと、間違いないと……」

宿利諒介…「あの時、初めに声を出したのは、俺だ」

小鳥遊望…「なぜ、そう思ったんですか………？」

鏡 朋己…「……言われてみればそうだったような……？ チーフは、覚えているんですね」

宿利諒介…「……なぜ……だろうな……、ただ、違うんだ。鏡」

宿利諒介…「覚えている、というわけではない……」

皇甲斐斗…「なるほど………」

宿利諒介…「その時点で俺は、すでに違う景色を見せられていたんじゃないのか………」

宿利諒介…「……なにを馬鹿な……、どうということなんだ……」

鏡 朋己…「チーフ……？」

小鳥遊望…「どうということ……？」

宿利諒介…「どうして記憶がこんなにおかしいんだ……！」

皇甲斐斗…「ここまで記憶を操作して何がしたいんだ……？」

猪狩幸太郎…「なににー？　どういう事……？　俺にもわかるように説明してよ……！」

宿利諒介…「できたら苦労はしない」

鏡 朋己…「俺たちだつて混乱しているんだ」

鏡 朋己…「あれが桜井じゃないなら一体誰だつて言うんだ」

小鳥遊望…「さなちゃんは、一体どこに……？　！」

皇甲斐斗…「猪狩、その三年前の死体つて他の誰かとのDNAは一致してるの？　例えば……三

年前のこの日に行方不明になつてた人とか……」

猪狩幸太郎…「いや詳しくはわかんないけどさ。それに同じ日に居なくなつた人つて言われても

DNAサンプルがあるわけじゃないから調べようないつて！」

猪狩幸太郎…「それにそういう人が居るか調べるのは零課とかの仕事でしょ……？　心当たりある

の？」

皇甲斐斗…「……………女性ということとは間違いないんだよね？」

猪狩幸太郎…「そう！ 女性つてのは確か！」

皇甲斐斗…「チーフっんっん」

宿利諒介…「つんっんされて横目で皇を見る」

皇甲斐斗…「猪狩は今チーフにとって信用できる人間でしょうか……………？（こそこそ）」

宿利諒介…「……………正直いま、彼がこの部屋に来てからそうは思い難くなっただな」

宿利諒介…「……………読めない。こいつが、何を思っただけ今俺達に情報提供しにきたのか？」

皇甲斐斗…「なるほど……………ではまだ彼に情報を共有するべきではないと……………」

宿利諒介…「猪狩くん」

猪狩幸太郎…「なにになに？」

宿利諒介…「悪いが今の俺達も話を聞かされた以上、情報整理をし直さなければならない。まとまっ

たら鑑識に行くよ。それでいいか？」

猪狩幸太郎…「えーまあいいけど。でも後で俺にもちゃんと教えてよ！俺もまた何かわかったらすぐ零課に伝えに行くし！」

宿利諒介…「わかった。すまないな」

猪狩幸太郎…「いーよー別にいい。じゃ、また後でね」

宿利諒介…「……時間が時間だが、あれを聞かされて、とても眠れるような状況じゃないな」

鏡 朋己…「ですね……」

小鳥遊望…「そう……ですね。何がなんだか……」

宿利諒介…「……今起きたことを、話していいか」

鏡 朋己…「はい」

皇甲斐斗…「……はい」

小鳥遊望…「はい」

宿利諒介…「猪狩に『例の死体が桜井ではない』と告げられた時」

宿利 諒介 …「当時の記憶が戻ってきた気がするんだ、いや、おそらく」

宿利 諒介 …「曇らされていたものが、晴らされた、とでも言えればいいのか」

宿利 諒介 …「……事件からずっと、曇らされていたのか？ バカな……」

皇 甲斐斗 …「本当ですか……！？ な、何を思い出したんですか………？」

宿利 諒介 …「何を……か」

小鳥遊 望 …「私も……記憶とのズレを感じました。何を……とはわかりませんが」

鏡 朋己 …「俺もだ 何故かあの時……誰かに操られていたような……」

皇 甲斐斗 …「それは俺も感じます。」

宿利 諒介 …「全員……か」

宿利 諒介 …「猪狩が告げた瞬間、記憶のズレに気づいた。皇とも話したが、今は彼にすべて情報共有することは控えた方がいいと判断する。」

宿利 諒介 …「だから今、全員の記憶において、俺達四人だけで共有できることはできるかぎり話しておきたい。異論はあるか？」

鏡 朋己…「いいえ。あいつ自身もなんだか、記憶が定かではないようですからね……慎重に動くべきでしょう」

宿利 諒介…「可能な限りで構わない。今まで記憶が曖昧で、かつ入り混じっている以上、出せる情報は冷静に判断して出してくれ」

小鳥遊望…「そう……ですね。共有すべきことは、しておくべきですね」

皇甲斐斗…「……はい」

宿利 諒介…「まず先ほど言った通りのことになるが、吊るされた死体を桜井だと言ったのは俺だ。だがこれ自体がそもそも間違いであり、操られていた可能性がある。何故性別しか判別つかないものを桜井と呼ばされたのかは俺には全くわからない。」

宿利 諒介…「……桜井は、吊るされてなどいなかった。今、思い出せた景色はそうだ。」

皇甲斐斗…「そう……ですか……………」

鏡 朋己…「吊るされていなかった……？」

鏡 朋己…「猪狩の言っていたように、やはり「あれ」は桜井ではないということですね…………？」

鏡 朋己 ……すみません、記憶のズレがあると分かったとはいえ正確な記憶があるかと言うと俺はこれ以上……」

宿利 諒介 ……いや、おそらく皆同じ状態だ。気負うな鏡。」

鏡 朋己 ……有難うございます……」

小鳥遊望 ……だとしたらあれは一体誰……？それに本物のさなちゃんはどこに……？」

皇 甲斐斗 ……ひとりだけこの死体だとしても辻褄が合う人がいるんだよね」

宿利 諒介 ……誰だ」

皇 甲斐斗 ……南玲子、かな。三年前から消息を絶っている。もしこの遺体が彼女なら消息を絶っているのにも辻褄が合うよね。」

宿利 諒介 ……確かに時期が合うな……」

小鳥遊望 ……」

小鳥遊望 ……ねえ、ともちゃん」

鏡 朋己 ……なんだ」

小鳥遊望 ……南玲子について、知ってるよね……？」

皇甲斐斗…「えっ……………!？」

鏡 朋己…「……………」

鏡 朋己…「……………あの死体が、南玲子のはずがない」

皇甲斐斗…「どうして……………そう思うんですか……………」

鏡 朋己…「死んでいてたまるか」

宿利諒介…「……………どうということか説明できるか、鏡」

鏡 朋己…「……………南玲子は……………」

鏡 朋己…「玲子は……………」

鏡 朋己…「俺の妹だからだ!」

宿利諒介…「……………」

皇甲斐斗…「で、でもそれならどうして名字が違うんですか……………」

鏡 朋己…「……………あいつとは小さい頃に色々あって生き別れたんだ
それからずっと探していた

俺にも何が何だか……………」

鏡 朋己…「……………」

鏡 朋己…(頭を抱えて黙り)

宿利 諒介…「だとして……手帳には兄であるお前は死んだことにされているようだな。ずいぶんと質の悪い手口に思える」

小鳥遊望…「(……………)」

皇甲斐斗…「……………望ちゃんはどうしてそれを知っていたの……………」

小鳥遊望…「……………詳しくはわからないんです。でも、名前にずっと既視感を覚えていて……………それで……………」

小鳥遊望…「ずっと……………ともちゃんの、叫び声が……………」。

小鳥遊望…「……………まわりついて離れないんです。」

鏡 朋己…「望……………」

皇甲斐斗…「叫び……………声……………」

小鳥遊望…「ずっと、『玲子、玲子』って呼んでいる……………ともちゃんの、叫び声」

小鳥遊望…「……………それだけしかわからないです」

鏡 朋己…「……………」(おもむろに南玲子の写真を出してみんなに見せる)

鏡 朋己…裏を見れば『人花教 カルト教団重要参考人／南玲子』と書かれている。」

鏡 朋己…「恐らくファイルに入っていたはずの写真だ ……俺が抜き取ったのかもしれない」

小鳥遊望…「……大切な妹さんなんだね」

鏡 朋己…「チーフの言う通り、玲子の手帳には齟齬があるように見えます」

鏡 朋己…「俺はこれを絶対に解決したい……」

皇甲斐斗…「……朋己さん……すみません……俺……」

皇甲斐斗…「証拠も不確かなのに……勝手に判断してしまつて……。刑事失格ですよね……」

鏡 朋己…「いや………そんなことを言うな この状況なら疑うのも分かる」

鏡 朋己…「俺も取り乱して悪かった」

小鳥遊望…「………」

宿利諒介…「小鳥遊、大丈夫か」

小鳥遊望…「……はい。大丈夫です……」

小鳥遊望…「(なんで、あんなに必死に叫んでいたんだろうか。なんで私がそれを知っているのだろうか……)」

宿利 諒介…「確かに安易な判断はできないな、現に俺も誤った行動をとらされていたんだ。その吊るされた死体が遺体安置所から持ち出された可能性や、執行された死刑囚から体よくつかわれてる可能性だつて無いとは言ひ切れない」

鏡 朋己…「調査を続けるしか無い……ですね」

宿利 諒介…「そうだな。定かではない記憶に下を向いている暇もないようだ」

皇 甲斐斗…「……そうですね。今日はどう行動しますか？」

宿利 諒介…「教会の床の鍵穴だったか、あれを確認する必要があるだろうな」

朝陽が僅かに零れ入る様な時間。窓から外を見れば、うつすらと霧がかっている。今日も寒いのだろう。そこに一つの無線が入る。

「各部隊に通達。各部隊に通達。警視庁捜査一課神童 大輔刑事が拳銃を所持したまま消息不明。繰り返し、警視庁捜査一課神童 大輔刑事が拳銃を所持したまま消息不明」

「止めようとした警備員を殴打し怪我を負わせたとの事」

「総員、これは緊急事態である。拳銃の所持を許可。これより神童大輔容疑者の搜索にあたる様に。容疑者は銃を所持している」

このような無線が繰り返し流れている。宿利諒介にも個別に連絡が入り、零課も神童の搜索にあたる事となった。そこにまた猪狩が駆け込んでくる。

猪狩幸太郎…「ちよつとちよつと聞いた!？」

猪狩幸太郎…「神童ちゃんいたいどうしちゃったんだろ。昨日もなんか変だったし……」

猪狩幸太郎…「とにかく零課も神童ちゃん追うんだよね?俺も心配だしついてくよ!」

各々が各々の名前のある拳銃と防弾チョッキを装着する。確かに「神童大輔」の場所には拳銃が無い。

鏡 朋口 : $CCB \leq 65$ 【目星】 ($1D100 \leq 65$) > 86 > 失敗

小鳥遊 聖 : $CCB \leq 70$ 【目星】 ($1D100 \leq 70$) > 66 > 成功

宿利諒介：CCB $\times$ =65【目星】(1D100 $\leq$ 65)>37>成功

皇甲斐斗：CCB $\times$ =(50) 目星 (1D100 $\leq$ 50)>31>成功

更に気が付くのは、もう一丁拳銃が持ち出されている事だ。そこに名前は無い。元々はネームが入っていたのだろうが、剥がされているようだ。

小鳥遊望：CCB $\times$ =60【アイデア】(1D100 $\leq$ 60)>42>成功

宿利諒介：CCB $\times$ =70【アイデア】(1D100 $\leq$ 70)>31>成功

皇甲斐斗：CCB $\times$ =(75) アイデア (1D100 $\leq$ 75)>15>スペシャル

その場所は、元々「桜井咲風」の銃があった場所だ。

小鳥遊望：「さなちゃんの拳銃が……?!」

宿利諒介：「確かにこの位置は桜井の……」

《HOO》:

銃を持った瞬間。あなたはある事を思い出す。

それは銃を撃った時の感覚だ。その独特の振動と匂いをあなたは鮮明に思い出す。

あなたは撃ったのだ。過去、人を殺すためにその銃を放った。愛する人を殺すために。その肉体が綻び、花が芽吹き切る前にと。

泣き叫び謝り続けている皇甲斐斗の声を聴きながら、あなたは桜井咲風を殺した。額に一発の弾丸を撃ち込んで。その死体が床に崩れ倒れる姿まで、あなたははつきりと思い出す。暗いその空間で、腹から血を流しながら彼女は事切れたのだ。

<SANCId3/Id6>

その刹那、ブツリ、という音が聞こえ以降の記憶は残っていない。

次に目が覚めた時、あなたは教会の祭壇近くでしゃがんでいた。

そこで吊るされていた別の女性の遺体を見て、あなたは咄嗟にこう思う事にした。

「あれは桜井だ。彼女は「誰か」に殺されて「吊るされた」のだ」と。

《HO1》: 宿利諒介 : CCB<82【SAN値チェック】(1D100<82)>84>失敗

《HO1》: 宿利諒介 : 1d6 (1D6)>1

《HO3》:

震える手で銃を持った瞬間。あなたはある事を思い出す。自分が元々銃を得意としている人間であつた事をだ。

あの日、あなたは、鏡 朋己が「やめてくれ」「撃たないでくれ」と懇願する声を聴かずただ何発も彼女に対して発砲していた。

鏡 朋己は「自分の妹だ」とも叫んでいた。

けれど最早その妹はとつくに事切れていたのだ。何度体に弾を受けてもそれは倒れる事は無かつた。

慟哭と絶叫が耳にこびりついて離れない。

ようやく彼女の額に銃弾が撃ち込まれると、体は動かなくなり、その肢体から伸びる蔭によって徐々に彼女の体は吊るされていった。

あなたは人を殺した事がある。しかも同僚のとても大切な人を。

〈SANc1d3/1d6〉

その刹那、ブツリ、という音が聞こえあなたは氣を失ってしまう。目を覚ましてもあの死体は変わらずそこに吊るされている。

けれど誰かが「桜井」と、それに告げた。

「あんならば、あれは桜井なのだ」とあなたはそう思い込むことにした。

「自分は桜井を撃っていない。ならば、違う誰かが彼女をああやって吊るしたのだ」と。

《H03》：小鳥遊望 :: CCB<=64 【SAN値チェック】 (1D100<=64) > 11 < スペシャル

《H03》：小鳥遊望 :: 1d3 (1D3) > 3

「小鳥遊望」 SAN : 64 → 61

小鳥遊望…「……………ああ、」

小鳥遊望…「……………私がやったんだ。」

鏡 朋己…「桜井の拳銃……誰かが持っていったのか？」

宿利諒介…「……行くぞ。立ち止まってる暇は……」

宿利諒介…「そんな暇は……ないんだ……」

皇甲斐斗…「チーフ……？」

宿利諒介…「……話しかけるな。神童さんを追うんだろが」

皇甲斐斗…「……………」

宿利諒介…「……………」

鏡 朋己…「チーフ、皇……！」

宿利諒介…「……すまない。行こう。……行……」

宿利諒介…「……鏡……、小鳥遊、」

宿利諒介…「……………猪狩と……先に行ってくれないか……」

鏡 朋己…「…わかりました 望、行くぞ」

小鳥遊望…「…はい」

鏡 朋己…「猪狩、お前もだ!」

猪狩幸太郎…「お、おう!」

宿利諒介…「先の零課でもお前は話さなかったが」

宿利諒介…「俺となら話せるだろ、違うか?」

宿利諒介…「…言えることを言え」

皇甲斐斗…「……………何……………言つてんの……………?俺は何も隠してないよ?」

宿利諒介…「……………そうか。」

宿利諒介…「あの欠片についてもお前は鑑識に渡そうとしなかった。俺にはわかるぞ」

宿利諒介…「お前は隠している」

皇甲斐斗…「……………それは……………内部の犯行だつて可能性があつたから、信用してなかっただけ……………」

宿利諒介…「そうだな。ただ、お前自身は鑑識に通さずとももう知っていたんだろう?」

宿利諒介…「知ってて黙っていた。そうだな？」

皇甲斐斗…「……」

宿利諒介…「貴様のツラをどれだけ見て生きていたか知らんのかお前は」

皇甲斐斗…「……あのさ、逆に聞くけど。人のこと言えるの……？」

皇甲斐斗…「そっちこそ何隠してるの？」

宿利諒介…「なるほど。隠したものを吐けばお前は吐くか？」

宿利諒介…「どうだろうな」

小鳥遊望…「チーフ、甲斐斗さん！悠長に話している暇はなさそうですよ！」

宿利諒介…「……」

皇甲斐斗…「あっ……」

宿利諒介…「すまない、行こう」

皇甲斐斗…「……………馬鹿にしゃがつて…………」





小鳥遊望・・「……………」

署から出る手前で、暴行を受けたらしい警備員が座り込んでいるのが見える。

警備員・・「多分、神童刑事だと思う……………」頭を打ったせいなのか何なのか、記憶が曖昧でわからないが」

警備員・・「ああ……………」確か、『あの場所』に、行かなくては……………」と、誰か、言っていたな……………」

教会の現場は変わらない。三年前と面影は変わっていない。

この場所に立ち入るのは、果たして何回目なのだろうか。

《H02》:

ふと小鳥遊望に目が行く。拳銃を所持して立っているその姿に激しい既視感と恐怖、そして憎悪が襲ってくる。

この教会で、あの祭壇の付近で、小鳥遊望は銃を何度も放っていた。

自分は叫びながら「やめてくれ」「撃たないでくれ」と言っていた。

それでも小鳥遊望は撃ち続けた。

小鳥遊望が撃ち続けた対象は、他でもない自分の妹だった。その体の腹部の切り傷から大量の血を流しながら、それでも植物に抱かれて立っている妹は、既に人間のそれではなかった。

駆け付けた時から、そんな事は解り切っていたが、あなたはどうしても彼女を抱き締めてやりたかった。

けれど、その望みは消え失せる。

あなたは目の前で探していた妹を殺された。

あなたが探していた妹はすでにこの世に居ない。

<SANCId3/1d6>

《HO2》: 鏡 朋己: CCB<=63【SAN値チェック】(ID100<=63)>67>失敗

《HO2》: 鏡 朋己: 1d6 (1D6)>3

〔鏡 朋己〕SAN: 63 → 60

《HO4》:

宿利 諒介が拳銃を持っている。それだけで途轍もない罪悪感を抱く。何故宿利 諒介に抵抗感を抱いていたのか、あなたは思い出す。

あの日、桜井咲風はもつと暗い場所で死んだ。少なくともあの教会で吊るされて死んだ訳ではないのだ。

誰かを追って自分と桜井は何処かを走っていた。懐から出されるナイフに自分は気付かず、足を止める事が出来なかった。動けずにいた自分の前に何かが躍り出す。

桜井だった。

彼女は自分を庇って腹部と胸を刺され死んでしまった。

そしてあとから来た宿利 諒介が自分達以外の誰かに向かって叫ぶ。自分は未だに動けない。

しかし隣にいた彼女から急に花や蔦が生い茂った。傀儡人形のように動かされる死体。その花々の間であの種が目に入る。

あの種の所為で、彼女は人としての死を奪われた。怪物となったのだ。
そんなつもりはなかった。けれど結果を前にそんな言葉は無意味だ。

<SANCId3/Id6>

《H04》: 皇 甲斐斗 : CCB<=67 SAN チェック (ID100<=67) > 82 < 失敗

《H04》: 皇 甲斐斗 : Id6 (Id6) > 2

「皇 甲斐斗」SAN : 67 → 65

鏡 朋己 : 「.....」

鏡 朋己 : 「.....」

鏡 朋己 : 「.....望.....」

小鳥遊望 : 「.....」

鏡 朋己 …「お前が……………」

鏡 朋己 …「お前が玲子を殺したのか」

小鳥遊望 …「……………」そう、みたいだね……………」

鏡 朋己 …「なんでだよ……………」なんなんだその言い草は……………」（望の胸ぐらを掴み）

鏡 朋己 …「ふざけるな」

鏡 朋己 …「ふざけるな畜生」

小鳥遊望 …「……………」

鏡 朋己 …「……………」何故……………」

鏡 朋己 …「……………」

小鳥遊望 …「……………」わたしも……………」わからないんだ……………」

鏡 朋己 …「わからないだと……………」

鏡 朋己 …「俺は見ていた、お前が……………」

鏡 朋己 …「玲子を何度も撃つところを……………」

鏡 朋己 …「お前が」（と言つて殴りかかろうとします）

猪狩幸太郎…「ちよつとちよつと!?!何身内で争つてゐるの!?!?」

皇甲斐斗…「もう……望ちゃんを責めないで……」

小鳥遊望…「……………」

鏡 朋己…(鬱陶しそうに皇を見て視線を逸らす)

鏡 朋己…「……………」

宿利諒介…「……鏡も、皇も、離してやれ」

皇甲斐斗…「……………ご……めんなさい……………」

鏡 朋己…「何度も懇願したはずだ……何度もやめろと……何度も……」(と言いながら力なく望を離して黙る)

宿利諒介…「……俺たちは搜索に来た。先の俺に言えることではないが、進めなければならん」

宿利諒介…「行こう」

鏡 朋己…「……………」

小鳥遊望…「……はい」

皇甲斐斗…「……………はい」

床下の扉に小さな鍵を使うと、カチャリと鍵の開く音が聞こえた。開ければ奥は暗く、冷え切っていた。地下道になっているらしい。

鏡 朋己 :: 1d100 (1D100) > 28

宿利 諒介 :: 1d100 (1D100) > 45

小鳥 遊望 :: 1d100 (1D100) > 100

皇 甲斐斗 :: 1d100 (1D100) > 90

自分達は覚えている。この道を覚えている。

そこで一人は大切な人を殺した。

そこで一人は大切な人を見つけた。

そこで一人は大切な人を守る為に撃った。

そこで一人は大切な人を苦しめてしまった。

光のない深い深いその地下道を歩みながら、

自分たちの吐く息は霧のように宙を舞い続ける。

吸い込む空気はどれも冷たく肺を満たしていく。

聞こえてくるのは自分たちの息遣いと、靴の音だけだった。

地下道を進んでいけば、重々しい扉が目の前に現れる。誰かが言い争っているようで、声が聞こえてくるだろう。

鏡 朋己：CCB≧65【聞き耳】(1D100≧65)＞18＞成功

宿利 諒介：CCB≧65【聞き耳】(1D100≧65)＞71＞失敗

皇甲 斐斗：CCB≧(60) 聞き耳 (1D100≧60)＞16＞成功

小鳥 遊望：CCB≧70【聞き耳】(1D100≧70)＞67＞成功

神童と的場の声のように聞こえる。

鏡 朋己：「! 的場さんたちの声だ」

宿利 諒介：「この向こうに……」

宿利 諒介：「犠牲が出てからでは遅い。……行くぞ」

鏡 朋己：「……………はい」

小鳥 遊望：「……………」

皇甲 斐斗：「……………」

そこは草木が生い茂る地下庭園のように思えた。その部屋を敷き詰める様に緑の絨毯が敷かれ、色とりどりの花が咲き乱れている。それは床だけに留まらず、天井にまで続き、とても美しい光景だと思えた。

部屋の中心では的場と神童が拳銃を手に対峙している。こちらには気が付いていないようで、何か怒鳴り合っているように思えた。

呆然とし、困惑し、つい視線が部屋へと戻ってしまう。それによりあなた達はこの部屋の全貌を改めて把握する事が出来た。

その草木は未だに増殖と成長を続けている。

床の草木もよく見れば異様な盛り上がりがあるだろう。人の形をしているようにも思う。そして二人の刑事が対峙している先の壁に十字架が掛かっている事にも気が付く。

そこに恭しく飾られている花と女性にも目が留まる。

うつすらと輝く冷たい光は、彼女の体に巻きつく花と蔦から発せられている。

一際美しく輝く銀色の花は、左胸で大きく咲き誇り、息を吸うように時折波打っていた。その脈動に呼応するように、周りの植物達はゆっくりと成長し続けているようだった。彼女の顔を、忘れた事は無い。

彼女、桜井咲風の遺体は未だ生きているかのように美しくそこに吊るされていた。SANC1/1d3

鏡 朋己 : CCB<=60 【SAN値チェック】 (1D100<=60) > 39 > 成功

宿利 諒介 : CCB<=81 【SAN値チェック】 (1D100<=81) > 17 > 成功

小鳥遊 望 : CCB<=61 【SAN値チェック】 (1D100<=61) > 5 > 決定的成功 / スペシャル

皇甲斐 斗 : CCB<=65 SAN チェック (1D100<=65) > 61 > 成功

【宿利 諒介】 SAN : 81 → 80

【鏡 朋己】 SAN : 60 → 59

【皇甲斐 斗】 SAN : 65 → 64

【小鳥遊 望】 SAN : 61 → 60

小鳥遊望…「……さなちゃん……」

鏡 朋己…「……………」

皇甲斐斗…「……桜……井……………」

宿利諒介…「……………」

宿利諒介…「咲風……………」

小鳥遊望…「（ああ、やっぱり）」

小鳥遊望…「（……………チーフだったんだ）」

変わり果てた桜井咲風の遺体を目の当たりにし、全員声を漏らしその場で固まる事しかできない。そんな時、的場と神童の会話が聞こえ貴方たちはハッとそちらへ意識を向ける。

神童 大輔…「あんたがやったんだろ、これも、三年前も！ どうなんだ！？」

的場 元…「落ちて神童……………！ そもそも拳銃を持ったまま出て行ったのはお前の方だろ

う！」

的場 元：「理由が何だか知らないが、銃を下せ」

神童大輔：「何を言っているんだ………あんたが警備員を殴って………」

神童が狼狽える様な表情を浮かべ、数歩的場から距離を取る。

その刹那、床全体が大きく脈打った。何事かと辺りを見回せば、部屋全体に蔓延っていた植物や蔦が自分達を飲み込む様に大きな壁を作り始めている。

小鳥遊望：CCB≧9*5【DEX】(ID100≦45)＞43＞成功

皇甲斐斗：CCB≧(17*5)DEX倍数(ID100≦85)＞77＞成功

宿利諒介：CCB≧(10*5)【DEX】(ID100≦50)＞93＞失敗

鏡 朋己：CCB≧9*5 DEX (ID100≦45)＞43＞成功

突然の事で宿利はよろめいてしまうが、小鳥遊が宿利の手を引き何とか難を逃れる事ができた。

的場も神童も動く事が出来ないのか、その場から駆けるような真似をしていない。

皇甲斐斗：CCB $\times$ (20*5) DEX 倍数 (ID100 $\approx$ 100) $\times$ 10 $\times$ スペシャル

皇甲斐斗：「神童さん……っ！！」

神童大輔：「……………っ！？」

神童に何とか駆け寄り、皇甲斐斗は彼をこちら側へと引き込んだ。草木たちが的場の近くまで伸びようとした時、それはぴたりと止まる。

的場 元：「はは……………酷いもんだ。俺を見捨てるなんて」

彼はうつすらと微笑み、何処か寂しそうに言った。

皇甲斐斗：「的場さん……………あなたは……………何を……………企んでいるんですか……………？」

的場 元：「……………お前達は大事な部下だったんだが、また性懲りもなく昔の事を思い出してしまったんだな」

的場 元：「大変だったよ……………。何度も思い出そうとするものだから、何度も記憶を奪う事

「なって手間だった」

皇甲斐斗「やっぱり的場さんだったんですか……っ！でもどうして、俺たちの記憶を……？」

鏡 朋己「なんだと……？」

小鳥遊望「どういうこと……？」

宿利諒介「的場さん……？」

的場 元「どうして？そんなの決まっているだろ。お前たちが大切だからだ」

「的場は桜井の死体を見上げてから、再度こちらを見詰めるだろう。」

的場 元「別に泉を殺す気は無かった………また記憶を奪えばいいと思っていたからな」

的場 元「でも、この種が三年越しに手に入った………桜井を媒介として、ようやく

………」

的場 元「そうしたらもう止められなかった………」

的場 元「泉の死体を見て思ったよ」

的場 元「見知った顔が、花に囲まれ死ぬ姿は………他のどれよりも美しくて、………興

奮する」

小鳥遊望：「……………!!!？」

鏡 朋己：「泉さんも…………お前がやったのか…………？」

鏡 朋己：「今までのこと全て…………」

的場 元：「はは、どうだろうな」

彼はパチンと指を鳴らす。

$s1d2+2(1D2+2)>1[1]+2>3$

草木の塊が三体現れゆらゆらとあなた達を囲むだろう。

的場 元：「だから、今回は三年前とは違う」

的場 元：「丁寧に全員殺そうか……………」

戦闘開始

的場 元：「お前達は大切だ。だからなるべく傷つけず、綺麗に死なせてやりたい」

～ R1 ～

その部屋に何かの粉が撒かれていく。何の粉かは解らないが、花から吹かれているようだ。

皇甲斐斗：CCB<=(70) 博物学 (1D100<=70)>89>失敗

的場 元：sl d3 (1D3)>1

的場 元：sl d4 (1D4)>1

的場 元：sCCB<=50 【拳銃】(1D100<=50)>48>成功

皇甲斐斗：CCB<=(40) 回避 (1D100<=40)>60>失敗

的場 元：1d10 (1D10)>6

宿利諒介：CCB<=(10*5) 【DEX】(1D100<=50)>37>成功

「宿利諒介」HP：13→7

宿利は咄嗟に皇の前に立ち、的場の拳銃を受ける。

鏡 朋己…「二人とも……………」

皇 甲斐斗…「チーフ……………」

小鳥遊望…「甲斐斗さん……………！チーフ……………」

宿利 諒介…「皇、構うな！今はお前にできることをしろ！」

的場 元…「皇、お前は本当に大切にされているんだな。三年前も、今も……………いつだってお前は守られている。そうだろう？」

皇 甲斐斗…「……………」

的場 元…「宿利も桜井の事はすまなかった。殺すつもりはなかったんだが、皇を庇って飛び出して来てしまった……………本当に残念だ。」

的場 元…「だが桜井も幸せな最後だっただろう。他の誰でもなく、最後は最愛の恋人に撃ち殺されたんだからな。なあ、宿利？」

宿利 諒介 ……………!!!!」

小鳥遊望 …「……!?!」

皇甲斐斗 …「……………ご、ごめんなさ……い……………」

鏡 朋己 …「皇……………!しつかりしろ!」

宿利 諒介 …「耳を貸すなカイト!」

的場 元 …「ああ、皇甲斐斗。お前はずっと優秀な宿利と比べられてきて生きてきて、ずっと宿利の事気にしていただろ? 見下され馬鹿にされて、自分が劣っていると感じていたんだろ?」

的場 元 …「だが違うぞ、皇。お前は本当に凄いんだ。……………お前が作った種は傑作だ。その種が魅せる花に俺は魅了された。感動した! 興奮した……………! お前は天才だ」

的場 元 …「お前が作った種のおかげで、桜井はこんなにも美しい姿になれたんだ。お前ならこの美しさがわかってくれるだろ?」

宿利 諒介 …「黙れの場……………!!!!」

皇甲斐斗 …「……………りよう、ちゃん……………ごめ、んなさ……い……………俺……………俺は……………つ!」

宿利 諒介 …「聞くなと言っているだろうが！今更お前が謝って何になる！」

皇 甲斐斗 …「……っ」

宿利 諒介 …「お前が苦しんでいることをわかってやれなかった俺も悪い。だがお前の技術を悪用したのは誰だ？お前が何かしたか！？違うだろうが！！」

皇 甲斐斗 …「だって……俺が……俺が南玲子と……桜井に……種を…………っ」

皇 甲斐斗 …「全部知ってたのに……言えなかった……、望ちゃんは何も悪くないのに……俺は……ずっと……黙って……」

皇 甲斐斗 …「朋己さんの妹も……桜井……りょうちゃんの大切な人も……俺が……怪物に……」

鏡 朋己 …「なに……？ 玲子を持っていた種は……」

鏡 朋己 …「……」

小鳥遊望 …「……ここで言い争ってる場合じゃない……ですよ！」

宿利 諒介 …「今は、的場を止めるんだ……」

皇 甲斐斗 …「……そう……だ……。俺が……なんとか……しなきゃ……」

神童大輔：「俺も加勢する……………！今は一旦下がって居ろ宿利！！」

神童大輔：sCCB $\hat{=}$ 80【拳銃】(1D100 $\hat{=}$ 80) > 95 > 失敗

神童は的場に向かって拳銃を放つが、自分の上司である的場を狙う事を踏ったのか外してしまう。

神童大輔：「……………くそ、すまない……………！！」

的場 元：「鏡、妹さんは残念だったな。けれど彼女も美しく咲いただろう！ 最期の死に方と

してあれほど素晴らしいものは無い！」

的場 元：「兄であるお前と同じ死に方をしたいと願った彼女の為に、お前も美しく咲いてやるべきだ。彼女を独りで咲かせておくなんて可哀想だろう？」

的場 元：「ずっと長い間生き別れていた兄妹の行く末がこんな悲劇で終わるなんて悲しすぎる。だからせめて最後は一緒に居てやるべきだ。」

的場 元：「な、そうだよ。鏡？」

鏡 朋己：「……………」

鏡 朋己：「俺がもつと早く見つけていけば……」

鏡 朋己：「俺と一緒に居てやれば……………花に……」

小鳥遊望：「……許せない」

鏡 朋己：CCB $\times$ =60【拳銃】(1D100 $\times$ =60) $\times$ 80 $\times$ 失敗

鏡は植物に対して拳銃を放つが動揺しているのか上手く当たらない。

鏡 朋己：「クソ…………!!」

鏡 朋己：CCB $\times$ =59【オカルト】(1D100 $\times$ =59) $\times$ 22 $\times$ 成功

植物を狙った時に貴方は気づく、『地獄の植物』は銃火器による攻撃を殆ど無効化してしまう。またまともに闘ってもこの植物は成長し続け、体力を回復し続ける。ただこの植物の力はそこまで強いものではない。巻ぎつかれても抵抗が上手くいけば剥がせるだろう。

鏡 朋己：「この調子だといつら(植物)はまともに相手しても意味がない…………!!」

鏡 朋己 …………… 望！的場を狙え」

鏡 朋己 …「植物らは少しくらいなら防げる！」

小鳥遊望 …「………わかった！」

的場 元 …「小鳥遊、お前は勇敢な奴だ。その優しさ、正義心で人を助けてきたのだろう。だが

それでお前はよりにもよって鏡の妹を殺す事になった。残念だよ」

的場 元 …「だが気にする事はない。お前もここで美しく咲いて死ぬんだから………嬉しい
だろう？小鳥遊は桜井と一番仲がいい友人だったんだろ？」

的場 元 …「……いや、違うか。友人ではなく、お前にとつてはそれ以上に桜井は大事な相手だつ
たんだろ？」

的場 元 …「宿利よりもずっと長く、お前は桜井を想ってきた………ならお前こそが桜井の隣
で綺麗に咲きたいとは思わないか？」

小鳥遊望 …「………うるさいな」

小鳥遊望 …「私は………！さなちゃんを………愛してた。でも………！」

小鳥遊望：「誰よりも班のみんなのことが大好きなんだ……！！私が……守るんだから！！」

☆へ挑発▽

初期値5%：この技能はその戦闘ラウンドの間ずっと効力を発揮し続ける。つまり一度成功してしまうと、戦闘が終わるまでの間永続的に機能する。効果は、敵からの攻撃が全て自分に向けられるというものだ。ただし知能数が自分よりも下の獣等にのみ有効である。

小鳥遊望：CCB≧79【挑発】(1D100≧79)＞30＞成功

猪狩幸太郎：「宿利ちゃん大丈夫！？」

猪狩幸太郎：CCB≧90【医学】(1D100≧90)＞56＞成功

猪狩幸太郎：1d3 (1D3)＞3

「宿利 諒介」HP：7 → 10

宿利 諒介：「……猪狩くん、すまない。感謝する」

猪狩幸太郎：「いいってことよ！零課の役に立てて嬉しいし！」

地獄の植物 × 3 : sCCB<=60 【巻きひげ】 (ID100<=60) > 98 > 致命的失敗
 地獄の植物 × 3 : sCCB<=60 【巻きひげ】 (ID100<=60) > 93 > 失敗
 地獄の植物 × 3 : sCCB<=60 【巻きひげ】 (ID100<=60) > 89 > 失敗

〜 R2 〜

宿利諒介 : CCB<=(17*5) 【POW】 (ID100<=85) > 59 > 成功
 皇甲斐斗 : CCB<=(14*5) POW 倍数 (ID100<=70) > 26 > 成功
 鏡 朋己 : CCB<=13*5 pow (ID100<=65) > 65 > 成功
 小鳥遊望 : CCB<=13*5 【POW】 (ID100<=65) > 68 > 失敗
 《Hoe》:「へろへき」眩暈を感じた」 SANC 0/1d3 《Hoe》:小鳥遊望 : CCB<=60 【SAN値チェック】 (ID100<=60) > 94 > 失敗

《H03》：小鳥遊望：1d3 (1D3) > 3

「小鳥遊望」SAN：60 → 57

小鳥遊望：「……っ眩暈が……！」

皇甲斐斗：「小鳥遊……！？」

鏡 朋己：「望！」

宿利諒介：「小鳥遊、気をしっかり保て！怯むな！」

小鳥遊望：「大丈夫です……！」

皇甲斐斗：CCB<=(70) 博物学 (1D100<=70) > 73 > 失敗

「小鳥遊望」CT：2 → 1

皇甲斐斗：CCB<=(70) 博物学 (1D100<=70) > 31 > 成功

これはあの種の花だ。花粉には酷い毒の作用がある。吸い込み過ぎるのは危険だ。時間はあまらないだろう。またこの花粉は全ての花から舞うものではない。宿主の素体からより多く放たれる。

逆に言えば、その素体を叩けば、花は死に花粉も発生しない。

《H04》…素体、それは貴方ならわかるでしょう。桜井咲風です。

皇 甲斐斗 …「みんな……っ！この植物から発生する花粉は人間に害のある毒だから、この花粉の発生源を止めないとまずい……っ！発生源は……桜井の体から……だ……。だから桜井を……」

皇 甲斐斗 …「……桜井の活動を……停止させる必要が……ある」

宿利諒介 …「……」

宿利諒介 …「……俺が撃つ」

皇 甲斐斗 …「……」

鏡 朋己 …「本当に撃たなければならないんですか……？」

小鳥遊望 …「……っ」

鏡 朋己 …「あの……桜井を……花を……」

宿利諒介 …「鏡……」

宿利 諒介…「俺は、これ以上犠牲は必要ないと思っている」

鏡 朋己…「だって桜井はあんたの……！」

宿利 諒介…「俺は、皆を死なせたくないんだ」

宿利 諒介…「だから、俺にやらせてくれ」

鏡 朋己…「……………」

神童 大輔： $sCCB \times 80$ 【拳銃】(1D100 $\times 80$) $\times 22 \times$ 成功

神童は今度こそその的場に向かって拳銃を構える。それはしっかりと的場を捕らえ銃弾が放たれる。しかし、次の瞬間。

的場をかばうように植物が銃弾を弾いてしまう。

的場 元…「はは。今度はちゃんと狙えていたのにな、残念だったな神童」

神童 大輔…「……………っ、くそ。植物をどうにかしないといけないのか……………」

鏡 朋己…「だがいくら撃つても……………」

神童 大輔…「宿利……………頼んだぞ」

的場 元 : $sl d_3 (1D_3) > 1$

的場 元 : $sl d_4 (1D_4) > 4$

的場 元 : $sCCB \times \equiv 50$ 【拳銃】 $(1D100 \times \equiv 50) > 63 \times$ 失敗

的場は小鳥遊に向かって拳銃を放つが、小鳥遊は颯爽とそれを交わす。

的場 元 : 「さすがだな小鳥遊。お前はずっとこの三年間努力してたもんな？」

的場 元 : 「だが俺はお前が拳銃を扱っているところをまた見たいんだが……………ああすまない。

できないんだったな？」

小鳥遊望 : 「……チッ」

宿利諒介 : $CCB \times (17*5)$ 【POW】 $(1D100 \times \equiv 85) > 15 \times$ スペシャル

奥にある桜井の姿にどうしても目が行ってしまふ。

そうして見ていると、微かに彼女の視線が動いた様に思えた。

呼んでいるのだ。

終わらせたいと。

あなたに願っているように思う。

その心臓から大きく花開く銀色の美しい花はアイビー。

『永遠の愛』を指す。

ここからなら何とか拳銃が届くだろう。





5+10+5 (1D10+5) > 6[6]+5 > 11





宿利 諒介 : $CCB \times = 76 + 10$ 【拳銃】 桜井を撃つ ($ID100 \times = 86$) $\times 39$ $\times$ 成功

宿利 諒介 : $Id10$ ($ID10$) $\times 5$

貴方は三年前のあの日と同じように桜井咲風に向かって拳銃を構え、放つ。しかしそれが彼女に届くことはなく銃弾は何かに弾かれてしまう。ただ彼女の周りで何かパキパキと崩れる音が聞こえる。

宿利 諒介 : 「……咲風……、俺が……」

宿利 諒介 : 「俺が終わらせてやるから……!」

鏡 朋 $\square$: $CCB \times = 60$ 【拳銃】 ($ID100 \times = 60$) $\times 64$ $\times$ 失敗

鏡 朋己 : 「宿利さんが決めたなら………それに従うまでだ 邪魔をするな!」

鏡は植物たちを牽制するように拳銃を放つ。それは当たる事は無かったが、植物たちがわずかに後ろに引いた気がする。

小鳥遊望 : CCB $\times$ =60【組み付き】(1D100 $\times$ =60) $\times$ 65 $\times$ 失敗

貴方は的場に組み付こうと近づくと、植物たちに阻まれる場に近づくことができない。

小鳥遊望 : 「鬱陶しいな………」

猪狩幸太郎 : sCCB $\times$ =90【医学】(1D100 $\times$ =90) $\times$ 31 $\times$ 成功

猪狩幸太郎 : 1d3 (1D3) $\times$ 3

「宿利 諒介」HP : 10 $\rightarrow$ 13

猪狩幸太郎 : 「はい！これで動きやすくなったでしょ！あ、でも無理しすぎちゃだめだからね？」

宿利 諒介 : 「……ありがとう猪狩くん、助かったよ。……下がってくれ。みんな、帰るぞ。」

猪狩幸太郎 : 「おう！頼んだよ！！零課の底力ってやつ見せてやんな！！」

地獄の植物 $\times$ 3 : sCCB $\times$ =60【巻やひげ】(1D100 $\times$ =60) $\times$ 21 $\times$ 成功

地獄の植物 $\times$ 3 : sCCB $\times$ =60【巻やひげ】(1D100 $\times$ =60) $\times$ 51 $\times$ 成功

小鳥遊望 : $CCB \leq 58$ 【回避】 ($1D100 \leq 58$) $\times 4$ 決定的成功 / スペシャル

小鳥遊は葛を絡ませようとしてくる植物を見切り、華麗に避けてみせる。

～ R3 ～

宿利諒介 : $CCB \leq (17*5)$ 【POW】 ($1D100 \leq 85$) $\times 93$ $\times$ 失敗

皇甲斐斗 : $CCB \leq (14*5)$ POW 倍数 ($1D100 \leq 70$) $\times 96$ $\times$ 致命的失敗

小鳥遊望 : $CCB \leq 13*5$ 【POW】 ($1D100 \leq 65$) $\times 26$ $\times$ 成功

鏡 朋己 : $CCB \leq 13*5$ POW ($1D100 \leq 65$) $\times 11$ $\times$ スピーシャル

「へらへら、眩量を感じろ」 SANc 0/1d3

宿利諒介 : $CCB \leq 80$ 【SAN 値チェック】 ($1D100 \leq 80$) $\times 91$ $\times$ 失敗

皇甲斐斗：CCB $\times$ =64 SAN チェック (ID100 $\leq$ 64) $\times$ 6 $\times$ スペシャル

宿利諒介：1d3 (1D3) $\times$ 2

「宿利諒介」SAN：80 $\rightarrow$ 78

「皇甲斐斗」SAN：64 $\rightarrow$ 63

皇甲斐斗：CCB $\times$ =(25) 組み付き (ID100 $\leq$ 25) $\times$ 33 $\times$ 失敗

的場 元：s1d3 (1D3) $\times$ 3

的場 元：sCCB $\hat{=}$ 60【恐怖の注入】(ID100 $\hat{=}$ 60) $\times$ 3 $\times$ 決定的成功／スペシャル

的場は宿利に対して呪文を唱える。その途端に宿利は当然恐怖に襲われる。SANC 0/1d6

宿利諒介：CCB $\times$ =78【SAN 値チェック】(ID100 $\leq$ 78) $\times$ 9 $\times$ スペシャル

宿利諒介：「止めるな。的場。俺は終わらせるぞ。全てを。」

宿利諒介：「皆のために、咲風のために……！」

宿利諒介：「貴様が曇らせた全てを晴らす！」

宿利 諒介 : $CCB \leq 76 + 10$ 【拳銃】 桜井を撃つ ($ID100 \leq 86$) $\vee$ $38 \vee$ 成功

宿利 諒介 : $Id10$ ($ID10$) > 1

「小鳥遊 望」CT : $1 \rightarrow 0$

宿利 諒介 : $Id10$ ($ID10$) > 3

鏡 朋己 : (何度も撃つチーフを見て望と玲子のことを思い出して顔をしかめる)

鏡 朋己 : $CCB \leq 25$ 【組み付き】 ($ID100 \leq 25$) $\vee$ $97 \vee$ 致命的失敗

貴方は的場に組み付こうとするが、またも植物に阻まれる。その隙についての場が貴方にナイフを振るう。

的場 元 : $sCCB \leq 80$ 【ナイフ】 ($ID100 \leq 80$) $\vee$ $38 \vee$ 成功

鏡 朋己 : $CCB \leq 48$ 【回避】 ($ID100 \leq 48$) $\vee$ $58 \vee$ 失敗

的場 元 : $Id6$ ($ID6$) > 3

小鳥遊望：CCB≦9*5【DEX】(1D100≦45)＞36＞成功

「小鳥遊望」HP：14→11

鏡 朋己：「望……!!？」

場のナイフが鏡に当たる前に小鳥遊が鏡を突き飛ばす。そしてナイフは小鳥遊の腕を掠め、傷口から流れ出た血が彼女の腕を伝っている。

小鳥遊望：「大丈夫だよ」

鏡 朋己：「この馬鹿が……………」

小鳥遊望：「みんなで……帰ろうね」

鏡 朋己：「……………」

鏡 朋己：「帰るぞ……………」皆で」

猪狩幸太郎：CCB≦90【医学】(1D100≦90)＞51＞成功

猪狩幸太郎 : 1d3 (1D3) > 3

「小鳥遊望」HP : 11 → 14

猪狩幸太郎 : 「これでおっけーだよ！ぶちかませー！小鳥遊ちゃん！！」

小鳥遊望 : 「猪狩さん、ありがとうございます……！」

猪狩幸太郎 : (ブイ！っとピースして笑っている)

地獄の植物 × 3 : sCCB<=60 【巻きひげ】 (1D100<=60) > 57 > 成功

地獄の植物 × 3 : sCCB<=60 【巻きひげ】 (1D100<=60) > 52 > 成功

地獄の植物 × 3 : sCCB<=60 【巻きひげ】 (1D100<=60) > 74 > 失敗

小鳥遊望 : CCB<=58 【回避】 (1D100<=58) > 10 > スペシャル

小鳥遊望 : CCB<=58 【回避】 (1D100<=58) > 55 > 成功

傷を負ってもなお怯むことなく小鳥遊は植物の蔭をいつものように華麗に避ける。

小鳥遊望：「チーフが、終わらせるんだから……！邪魔しないで……！」

～ R3 ～

宿利諒介：CCB<=(17*5) 【POW】 (1D100<=85) > 57 > 成功

皇甲斐斗：CCB<=(14*5) POW 倍数 (1D100<=70) > 92 > 失敗

小鳥遊望：CCB<=13*5 【POW】 (1D100<=65) > 92 > 失敗

鏡 朋己：CCB<=13*5 POW (1D100<=65) > 13 > スピシャル

「へらへら、眩量を感じろ」 SANc 0/1d3

皇甲斐斗：CCB<=63 SAN チェック (1D100<=63) > 24 > 成功

小鳥遊望：CCB<=57 【SAN 値チェック】 (1D100<=57) > 24 > 成功

皇甲斐斗 : CCB<=25) 組み付き (1D100<=25) > 98 > 致命的失敗

皇は的場に組み付こうとするが相変わらず植物が邪魔をして近づくことができない。そしてその隙を見て的場が貴方にナイフを振るってくる。

的場 元 : sCCB<=80 【ナイフ】 (1D100<=80) > 88 > 失敗

しかし先ほど鏡に対してナイフ振るっているのを見ていた貴方は、予見してそれを避ける。

的場 元 : s1d3 (1D3) > 3

的場 元 : sCCB<=60 【恐怖の注入】 (1D100<=60) > 56 > 成功

的場は宿利に対して呪文を唱える。その途端に宿利は当然恐怖に襲われる。 SAN: 0/1d6

宿利諒介 : CCB<=78 【SAN 値チェック】 (1D100<=78) > 82 > 失敗

宿利諒介 : 1d6 (1D6) > 1

「宿利諒介」 SAN : 78 → 77

宿利諒介 : 「……咲風、俺は相変わらず弱いみたいだ」

宿利諒介：「三年前、お前に花が咲き切らないうちにと頭を撃った」

宿利諒介：「その事実を認めたくなくて、俺はわざと違う存在をお前だと叫んだ。」

宿利諒介：「自分を守りたかつたんだ、お前を撃つたことを認めたくかつたんだ」

宿利諒介：「楽にさせたはずのお前をこうして苦しめていたなんてな……」

宿利諒介：「今度こそ、お前のために……撃つ」

宿利諒介： $CCB \times 76 + 20$ 【拳銃】桜井を撃つ $(1D100 \times 96) \times 3 \times$ 決定的成功／スペシャル

宿利諒介： $2d10$ $(2D10) \times 14[4,10] \times 14$

最後の一発を桜井咲風に撃ち込んだ瞬間、びくり、とその体は波打ち、壊れた玩具のように全く動かなくなつた。同時に周囲に伸びていた植物も、彼女の体を吊るしていた蔦も全てみるみる内に枯れていく。

的場は啞然とし、桜井を見詰めながら「何という事を」と口にする。

そして胸元から再びタブレットケースのようなものを取り出すのを、あなたは見逃さなかった。そうはさせまいと皇甲斐斗が素早く彼の身柄を拘束し、手錠を掛ければ、ハッとしたように彼は顔を上げる。

けれど、的場はうつすらと微笑み

的場 元…「なあ、これを外してくれ」

的場 元…「お前達も見ただろう？ とても美しいと思わなかったか？」

というような言葉を告げてくる。

彼はしきりに、その美しさを、彼女達の死に様を語り出すだろう。きっと、理解してもらえらるだろうと。そう信じて疑わないような素振りで話し続けている。

皇甲斐斗…「……嫌です……っ」

皇甲斐斗…「たしかに、死んだ人には花を手向ける。それはその人の最期を美しく着飾る。」

皇甲斐斗…「でも、これは違う……。死んだ人を無理矢理花に絡ませて操って……。こんなの美しさでもなんでもない……。」

皇甲斐斗…「俺はこんなもの作りたくなかった……。」

皇甲斐斗…「俺は、植物が大好きだったんだ……。誰かを幸せにできる。そんな美しい花たちが……。」

皇甲斐斗…（種を奪う）

皇甲斐斗…「的場さん、これ以上誰かを、植物を傷つけるのはもう終わりにしましょうよ……。」

皇甲斐斗…「俺も自分の罪は自分で償います。」

的場 元…「何故だ？ あんなにも美しいのに、なぜそれがわからない？」

的場 元…「お前は最高なものを作ったんだ皇。何を償う必要がある？」

皇甲斐斗…「……………」

的場 元…「お前ならわかってくれるだろう？ だから放してくれよ。もつとこの種の事知りたいだろう？」

皇甲斐斗…「……そうだね。俺がこんなものを作らなければ的場さんはこんなことにはならなかったよね」

鏡 朋己…「的場……まだ戯言を……」

小鳥遊 望 …… 甲斐斗さんは、誰かを幸せにしたくてあの種を作ったんですね。そんな優しい気持ちで……自分の快楽のために利用した的場が悪いです」

宿利 諒介 ……「何を言おうがその手錠は外さん。神童さん、的場をこのまま署までお願いします」

神童 大輔 ……「ああわかつている。皇、代われ。俺が連れていく。」

皇 甲斐斗 ……「はい……。」

床に降ろされた桜井咲風の遺体に触れてみれば、氷のように冷たかった。勿論目を覚ます様な事は無い。

彼女は三年前にとつくに死んでいるのだ。

けれど、その表情は何処となく穏やかなもののように思える。

終つたのだと、そう安堵するような声が今にも聞こえてきそうだった。

宿利 諒介 ……咲風、三年間も、苦しめてしまつてすまなかつた。」

宿利 諒介 ……お前の死にはいろんな人間が絡んでいる。俺が代表して謝罪する……」

宿利 諒介 ……「本当に……」

宿利 諒介 ……「……」

宿利 諒介 ……「本当にすまなかつた……！」

宿利 諒介 ……「……」

鏡 朋己 ……「宿利さん……」

小鳥遊望 ……「……チーフ。」

小鳥遊望 ……「これ、お返ししますね」

小鳥遊望 ……（といって手帳を渡します）

宿利 諒介 ……「これは……？」

小鳥遊望 ……「さなちゃんの机を調べた時にできた手帳です。………隠しててごめんなさい。」

小鳥遊望 ……「さなちゃんは、チーフと一緒にいられて、幸せだったんですね……」

宿利 諒介 ……小鳥遊、きみは、隠すのが上手すぎるな。」

宿利 諒介 …「君がどんな気持ちで俺達を見ていたのか、考えるだけで苦しくなるよ」

小鳥遊 望 …「あはは……。知らなかったんです。わたし。さなちゃんに相手がいること。でも、チーフなら納得ですよ。」

小鳥遊 望 …「びつくりして隠しちゃいましたけど……」

宿利 諒介 …「……隠したくなるだろう……俺が同情できる立場ではないんだが」

宿利 諒介 …「……きつとその手帳から外れた付箋があれだったんだろうな」

宿利 諒介 …「咲風の名を見たんだ、懐かしかったよ。『プロポーズは付き合った記念日と同じ日に決行!』ってな。」

宿利 諒介 …「お前たちに質問する。」

宿利 諒介 …「俺にとつて最も大切な日は？」

皇 甲斐斗 …「二月……二十九……日……」

鏡 朋己 …「!!……………二月二十九日…………です」

小鳥遊 望 …「二月、二十九日です」

宿利諒介…「よかった。みんな俺の信じてる宿利班だ」

宿利諒介…「今まで隠していたこと、謝罪させてもらう。」

宿利諒介…「俺は桜井と、咲風と付き合っていたんだ。本当にそれだけなんだがな」

宿利諒介…（ポケットから咲風の指輪を出して皆に見せます）

鏡 朋己…「全く知りませんでしたよ……」

小鳥遊望…「……見たかったなあ……、チーフと……さなちゃんの結婚式……」

皇甲斐斗…「俺はチーフの補佐なのに、気付けなかったなあ……」

宿利諒介…「いいんだ。気づかせないようにうまくできてただろう？ここ、見てくれ。付き合ってた日付が彫つてあるんだ」

宿利諒介…（指輪の裏には0229と彫られています）

宿利諒介…「俺にとつて、最も大切な……大切な日になる予定だったんだ」

宿利諒介…「小鳥遊、俺はあまり頭がよくないんだ。後先をあまり考えないんだが」

宿利諒介…「今からやることを許してくれるか？」

小鳥遊望…「……もちろんですよ」

宿利諒介…「……ありがとう」

宿利諒介…（咲風の左手薬指に指輪をはめて、両手を組ませます）

宿利諒介…「……」

宿利諒介…「……咲風、見守ってくれ。俺達は次に進まなければならない。」

宿利諒介…「俺がやるのは、ここまでだ」

宿利諒介…「ありがとう、咲風。……この世で一番愛してた。」

《H01》…桜井咲風に「愛してた」と告げたその一瞬。僅かに彼女がほほ笑んだような気がした。

小鳥遊望…「（やっぱりチーフには……かなわないな。チーフがさなちゃんの相手で……良かった）」

宿利諒介…（立ち上がって班員に振り返ります）

宿利諒介…「……皆、辛い思いをしたな。だが、今日までの事を忘れるな」

宿利諒介…「俺達は、罪も、後悔も、全て背負って進んでいくんだ」

宿利諒介…「それが、零課の……宿利班の使命だ。いいな？」

鏡 朋己…「………はい もちろんです」

鏡 朋己…「一生ついていきますよ ここまできたら」

皇 甲斐斗…「……はい。必ず」

小鳥遊望…「……はい！これからも……みんなを守ります！」

宿利諒介…「それでこそ宿利班だ。……皆、ありがとう。」

宿利諒介…「カイト、頼みがある」

皇 甲斐斗…「……！なに……？」

宿利諒介…「咲風の葬儀や、彼女の墓前に似合う花、選んでくれないか」

皇 甲斐斗…「……俺が……選んで良いの……？」

宿利諒介…「当たり前だ。俺の補佐なんだろう？言っておくが拒否権などないぞ」

皇 甲斐斗…「……つ、うん……！……！もちろん……！俺が……拒否するわけ……ないじゃん

……っ！」

宿利諒介…「だろうな。ほら、行くぞ。鏡と小鳥遊もついてこい」

鏡 朋己…「はい！」

小鳥遊望 …「はい！」

小鳥遊望 …「愛してたよ、さなちゃん」

やがて、神童と猪狩が応援の刑事を呼び、あなた方はともかくもその場を後にすることとなった。

的場は連行される間際まで、花の事を口にし、そして悪びれも無く自白もした。尋問などする必要もなく、彼は事細かにこれまでのことを語り、微笑んでいたという事だった。諦め故か、それとも興奮しているだけか。とにかく彼は狂気すらも受け入れて、全てを話した。

しかし彼の語るオカルトの類は中々に信用はされず、調書を取るのにも難航したようだ。『ゼロ』の面々も的場同様、何かカルト的なものに染まっていたのではないか。などという噂すら流れたが、神童と猪狩の証言もあり、その噂が大きく広がる事は無かった。

調書を取る中で、的場はこう言っただけ。

「三年前の庭師が俺だったか、だって？何を言っているんだ」

「そもそも庭師なんて犯人は存在しないだよ」

「もし『庭師』などという犯人が居たのなら、それは罪から逃れる為に生まれた罪惡の表れだろう」

「俺は、ただそれを利用しただけだ」

そうして自分の喉元に埋められた透明な種を見せてきたという。

あなた方は神童たちの助力を受けながらも、二か月の謹慎処分を受ける事となった。その謹慎の間に、改めて桜井咲風の葬式をあげる事となった。桜井咲風の墓から南玲子の遺骨を取り出し、そこに彼女を埋葬する為にと神童が手を打ってくれたらしい。

葬儀では皇甲斐斗が選んだ花に包まれて、今度こそ彼女は安らかに眠りについたのだ。

火葬場にて、あなた方は骨だけとなった桜井咲風を静かに骨壺の中へと入れていく。あらゆる花の色を纏ったその小さな欠片たちを、ただ静かに運ばせた。最後にその蓋が閉められる時、陶器が重なり合う音がその場に響く。それedyやつとあなた方はまともに息を吐く事が出来た。

『庭師』はこれをもって、確かに終わったのだ。

貴方たちは桜井咲風の葬式を終え、先に鏡と小鳥遊の二人は帰路につく。

駅までの帰り道を二人は歩いている。

鏡 朋己 ……………」

鏡 朋己 …「ようやく落ち着いたな」

小鳥遊望 …「……そうだね！」

鏡 朋己 ……………」

鏡 朋己 …「……あー……………」

鏡 朋己 …「……クソッ」

小鳥遊望 …「……どうしたの？」

鏡 朋己 …「……………すまなかった」(深々と頭を下げる)

小鳥遊望 …「!？」

小鳥遊望 …「ともちゃんが謝ることじゃないよ」

鏡 朋己 …「いや……………謝らせてくれ 今までの態度も……………教会でのことも……………」

鏡 朋己 …「お前は……………玲子を救ってくれたんだな」

小鳥遊望 …「……………それでも、」

小鳥遊望…「……ともちゃんの大切な妹さんを、奪う結果になってしまった。」

小鳥遊望…「……私こそ、ごめんなさい……」

鏡 朋己…「俺だったら、出来なかったと思う いや、絶対に無理だった……」

鏡 朋己…「あの時的場に惑わされて、玲子と一緒に……とも思った」

鏡 朋己…「だがお前はあの時、俺も救ってくれた」

鏡 朋己…「……有難う、望。」

小鳥遊望…「……!？」

小鳥遊望…「こちらこそ……、許してくれて、ありがとう……」

鏡 朋己…「……」

小鳥遊望…「あは……二人で、大の大人が泣いてるよ……」

鏡 朋己…「ふっ……」

鏡 朋己…「後もう一つ」

小鳥遊望…「……?」

鏡 朋己…「お前に頼みがある」(望の手首をガシッと掴んで)

小鳥遊望…「???」

鏡 朋己…「俺の髪を切ってくれ」

小鳥遊望…「ええっ?!」

鏡 朋己…「もともと妹を探すために願掛けとして伸ばしていたんだ」

鏡 朋己…「これははじめでもある」

小鳥遊望…「…私でいいの?」

鏡 朋己…「お前に切ってもらいたい」

鏡 朋己…「頼む」

小鳥遊望…「…わかった!任せて!」

鏡 朋己…「失敗するなよ」

二人はそのまま鏡の家に向かう。帰り道で買ったのか、家にあつたものなのか小鳥遊の手には散髪用のハサミが握られている。

鏡 朋己：「……今更不安になってきたが、頼む」

小鳥遊望：「大丈夫！いつも前髪切ってるもん！」

小鳥遊望：「……じゃあ、いくよ！」

小鳥遊望：CCB×9*5【DEX】髪を切るよ！（ID100≧45）×24＜成功

小鳥遊は普段から自分の髪を切っていたのもあり、綺麗に鏡の髪を切ることができる。

小鳥遊望：「……ふう」

鏡 朋己：「……………まあまあだな」

鏡 朋己：「後ろが落ち着かん」

小鳥遊望：「ふふ、案外短いのも似合ってるね。ともちゃん」

鏡 朋己：「なら良いが……」

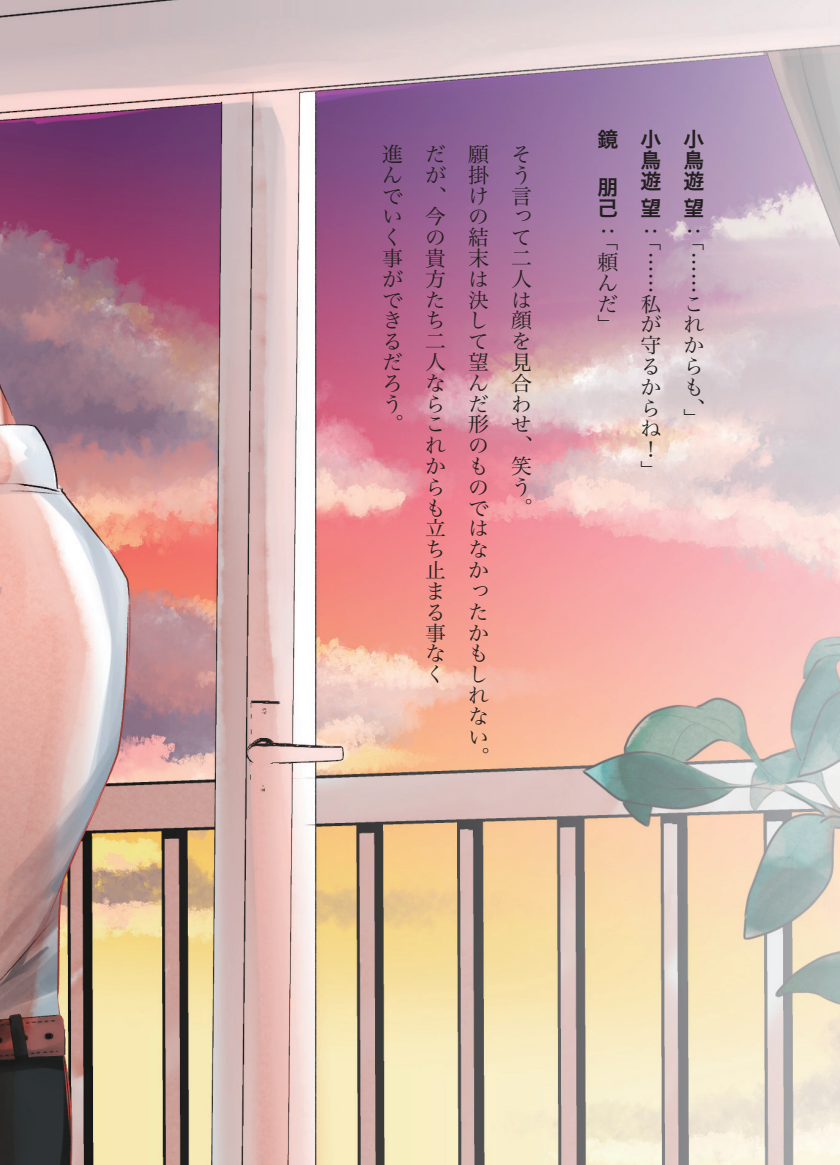
小鳥遊望：「うんうん！かつこいーぞ！」

鏡 朋己：「……………うるさい」（照れている）

小鳥遊望：「照れてるでしよー！」

鏡 朋己 ..「うるさい」(望の髪を雑にぐしやぐしやしなうがら)

小鳥遊 望 ..「わあ?!」



小鳥遊望…「……これからも、」

小鳥遊望…「……私を守るからね!」

鏡 朋己…「頼んだ」

そう言って二人は顔を見合わせ、笑う。

願掛けの結末は決して望んだ形のものではなかったかもしれない。

だが、今の貴方たち二人ならこれからも立ち止まる事なく

進んでいく事ができるだろう。



宿利と皇は二人で桜井咲風の墓参りをしに来ていた。それぞれ何か彼女に報告したのかもしれない。

彼女への追悼を終わらせれば、二人一緒に帰路につくだろう。

幼い頃と変わらず二人は肩を並べて帰り道を歩いている。

宿利 諒介…「カイト、いい花を用意してくれてありがとうな。きっと咲風も喜んでる」

宿利 諒介…「昔からセンスがいいやつだからなお前は」

皇 甲斐斗…「……ううん、……桜井ちゃんが喜んでくれてるなら良いな」

皇 甲斐斗…「……」

宿利 諒介…「どうした？」

皇甲斐斗…「……こんなことで許されるなんて思っていないけど、ちゃんと謝りたい。」

皇甲斐斗…「ごめんなさい。」

皇甲斐斗…「りょうちゃんの大切な人の命を脅かしてしまったこと、りょうちゃんに酷い態度を取ってしまったこと。全部俺が未熟だった。」

皇甲斐斗…「……………ずっと、りょうちゃんが憎かった。何でもできて俺がどんなに手を伸ばしても、りょうちゃん先に行っちゃうんだもん。」

皇甲斐斗…「全部りょうちゃんの努力なのにね、勝手に恨んで、回り道して、馬鹿だよ俺」

皇甲斐斗…「……………俺のこと……………嫌いになった……………？」

宿利諒介…「……………」

宿利諒介…「どんな返事が欲しいんだお前は」

皇甲斐斗…「……………意地悪だなあ……………」

宿利諒介…「……………ああ、そうだな。悪かったよ。」

皇甲斐斗…「ちゃんとりょうちゃんの言葉が聞きたい。」

宿利諒介…「嫌いだったらこうして歩くわけないだろ」

宿利諒介…「お前にもだいぶ辛い思いをさせてたんだな。それも長い間」

皇甲斐斗…「……違うよ……俺は勝手にりょうちゃんのこと……」

皇甲斐斗…「なのに……りょうちゃんは……俺と隣を歩いてくれるんだね……」

宿利諒介…「ずいぶんと今更だな」

皇甲斐斗…「……へへ」

宿利諒介…「俺は妥協して生きるほど馬鹿じゃないんだ」

宿利諒介…「これからもついてこいカイト。俺の補佐として、幼馴染として」

皇甲斐斗…「……もちろんだよ、はい（花をチーフの……胸ポケットに差す）」

宿利諒介…「……残念ながら俺は花に詳しくない。何の花か教えてくれるか？」

皇甲斐斗…「……ナイシヨ」

宿利諒介…「こいつ……後で調べてやるからな」

皇甲斐斗…「やだく俺逃げ足は速いんだよね」

宿利諒介…「俺だって、お前に敵わないものはたくさんあるんだぞ、カイト」



そう言い合いながら二人は、笑う。

近すぎて見えなくなつて絡まつた糸が、ようやく解けたようなそんな感覚がした。

これからも二人は肩を並べ、歩いていく。幼馴染として。

お互いを支える相棒として。

今日は二月二十九日。

貴方たちは皇甲斐斗の家を集まっていた。

今日は宿利諒介の誕生日だ。

それぞれ料理を作ったり、何かを持ち寄ったりし準備をしているだろう。

皇甲斐斗：CCB×(40) 製作(料理) (1D100×40) > 18 > 成功

皇は張り切って誕生日パーティーの料理を作る。

特に目を引くのはイチゴが沢山のつたおつきな誕生日ケーキだろう。

小鳥遊望…「甲斐斗さんの料理、すっごくいい！」

鏡 朋己…「本当にごちそうだな」

宿利諒介…「ずいぶんと振舞ってくれるな……たいへんだっただろ」

皇 甲斐斗…「今日はチーフの誕生日アンド記念日だからねー！ これぐらいはさせてよ」

宿利諒介…「誕生日だけでいい……が、まあいいか」

鏡 朋己…「ろうそくは……三十六本か？」

小鳥遊望…「えー？そんなに刺したら燃えちゃうよ？」

宿利諒介…「鏡は髪と一緒にネジまで飛んだのか？」

鏡 朋己…「じゃ 冗談です」

宿利諒介…「わかつてるさ」

皇甲斐斗…「あはは、ちゃんと3と6のロウソクがありますから！」

宿利諒介…「まあ祝われるような歳とも思えんが、悪くないな。ありがとうカイト、皆」

鏡 朋己…「チーフ、誕生日おめでとうございます」

皇甲斐斗…「誕生日おめでとう、チーフ」

小鳥遊望…「チーフ！お誕生日おめでとう！」（クラッカーを鳴らす）

宿利諒介…「……ありがとう、嬉しいよ。4年に一度ではあるが、だからこそこうして集まって祝ってもらえるのも感慨深いものだな」

宿利諒介…「正直俺は、誕生日がこんな特殊な日だけあってあまり好きじゃなかったんだ。祝われることも、祝うことも」

宿利諒介…「ただこうして皆に祝ってもらえて、純粹に嬉しいし、等しく返すべきだとこの年でやっと思つたよ。……だから」

宿利諒介…「お前たちの誕生日を覚えてくれ。………今更だがな」

宿利諒介…「ちゃんと覚えておくから楽しみにしてろ。もちろん、全員で祝うぞ。いいな？」

鏡 朋己…「はい！」

小鳥遊望…「はい！」

皇甲斐斗…「うんっ！」

こうしてあなた達の日常は続いていく。これから先も、四人揃って。

——四人の庭師は、色とりどりの花々と、自身の望んだ緑を添え、
虚構の庭園を作り上げた。
この世界が存在しているから人間が存在しているのではなく、
また人間が存在しているから世界が存在しているのではない。

両者に前後関係はなく、ただあるのは「氣遣い」だけだ。

クトゥルフ神話TRPG

『庭師は何を口遊む』【END—A】全生還

●HO1 事前秘匿 宿利 諒介

あなたは三年前に死亡した「相模原涼」の恋人である。
しかしこの事実は同じ課の誰も知らない秘密だ。
あなたは彼女を愛し、また彼女から愛されていた。
故に三年前からの心の傷は未だに癒えていない。

彼女の事件を追う内、犯人である『庭師』は警察署内関係者の誰かである可能性が高いとされた。
理由としては相模原自身が、体術・防衛手段に於いて一般人に劣る事が無い事。
更に彼女が非常に警戒心が強い人物であると知っているからだ。
あなたは恋人が無残な死に方をした為か、その前後の記憶が曖昧な状態だ。

だが一つだけ確かな事は、その死体を見て一番に「相模原」と名を呼んだのは自分という事だ。



●HO2 事前秘匿 鏡 朋巳

あなたには幼少期に生き別れた歳の近い妹が居る。
妹を探す為に、あなたは情報収集の技能を身につけていったのだ。

妹を探している中で、とあるカルト教団の噂を入手する。
そのカルト教団跡地は今既に取り壊されてしまっているが、そこで発見された美しい花から何故か死刑囚の DNA が発見された。

だが死体は見付からなかった。あなたはそのカルト教団の資料をどうにかして手に入れたいと思っている。

またあなたは HO3 の事を快く思っていない。
それは表面に出しても出さなくても構わない。
ただ何故そう思っているのかあなたには確かな記憶というものがない。

三年前のあの日以来、記憶が曖昧なのだ。

そしてあなたはある程度の＜コンピューター＞技能を有する立場である。



● HO3 事前秘匿 小鳥遊 望

あなたは基本技能として初期値で＜拳銃＞40%を持っている。

しかしあなたは拳銃を持つことが出来ない。持とうとすれば酷く手が震えてしまうからだ。

これは誰にも言えない秘密である。

その明確な理由に関してもあなたは忘却してしまっている為、説明する事も出来ない。

あなたは大量の血を見る度に SANC0/1 が入る。

これは『訳のわからない恐怖心』によるものだ。

ただし、あなたはその代わりとして誰よりも努力し屈強な体を手に入れた。肉弾戦に於いて右に出るものは居ないのだ。

三年前のあの事件以来、あなたは仲間の誰も失いたくないと思っており、そうした正義感を持った人物である。

誰よりも班を想い、仲間を考え支えたいと願っている。



●HO4 事前秘匿 皇 甲斐斗

あなたは非常に多趣味な人物であり、医学的なものから博物学的なものまである程度理解している。

三年前の事件より以前は植物を育て、仕事の傍らそうしたものの研究もしていた。

しかし事件後は花に対して強烈なまでの嫌悪感を抱くようになってしまっている。記憶が曖昧で何故かはわからない。

あなたはかつて、今はなき植物研究サークルに自身が育てた花や種を売っていた。そのサークルで殊更熱心に花について勉強をしていた女性が居たのを知っている。

名前は「南 玲子(みなみ れいこ)」。

花に興味を失ってしまったあなたはその女性ともそれきり会わなくなってしまう。

あらぬ誤解をされたくないあなたはその女性については黙っている事にした。

あなたはHO1の補佐をしつつも、どこかHO1に抵抗感を抱いている。

その立場故か劣等感故かあなた自身にも解らない。



庭師は何を口遊ぶ

北極シロクマ製作委員会

THANK YOU FOR PLAYING!

本リプレイは、「株式会社アークライト」及び「株式会社 KADOKAWA」が権利を有する
『クトゥルフ神話 TRPG』の二次創作物です。

Call of Cthulhu is copyright ©1981, 2015, 2019 by Chaosium Inc. ;all rights reserved.

Arranged by Arclight Inc. Call of Cthulhu is a registered trademark of Chaosium Inc.

PUBLISHED BY KADOKAWA CORPORATION 「クトゥルフ神話 TRPG」

クトゥルフ神話 TRPG・リプレイ

庭師は何を口遊ぶ

- 宿利班編 -

編集

ましまろ (Ma246)

印刷

製本直送

発行

二〇二二年
九月

本リプレイは、「株式会社アークライト」及び「株式会社 KADOKAWA」が権利を有する

『クトゥルフ神話 TRPG』の二次創作物です。

Call of Cthulhu is copyright ©1981, 2015, 2019 by Chaosium Inc. ;all rights reserved.

Arranged by Arclight Inc. Call of Cthulhu is a registered trademark of Chaosium Inc.

PUBLISHED BY KADOKAWA CORPORATION 「クトゥルフ神話 TRPG」